

第11回大会

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会

報告書



関東近県生涯学習社会・教育実践研究交流会実行委員会

目次

1 はじめに	2
2 大会テーマ及び日程	3
3 第11回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会参加者集約結果	4
4 事例発表まとめ	5
5 アンケート集計結果	29
6 特別講演	47
7 トークセッション	51
8 クロージングトークセッション	54
参考資料	57

1 はじめに

「第11回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会」の開催にあたり、関東近県各地より多くの皆様をお迎えし、成功裏に終了できましたことに心より感謝申し上げます。

昨年度は、第10回記念大会として「第66回全国社会教育研究大会茨城大会」と同時開催し、全国の仲間と共に社会教育の未来を語り合う、大きな節目の年となりました。その熱気を引き継ぎ、第11回を迎える本大会は、会場を「茨城県水戸生涯学習センター」に移し、新たな10年に向けた第一歩を踏み出しました。心機一転、新たな拠点から私たちの実践と探求を再始動させる、意義深い大会となったと感じております。

本大会では、「分断を乗り越え、共に生きる社会へ～生涯学習からはじめる平和と多文化共生の探求～」をテーマに掲げました。世界に目を向ければ紛争や分断が絶えず、国内においても地域社会の希薄化や孤立・孤独といった課題が深刻化しています。こうした困難な時代だからこそ、私たち一人ひとりが「学び」を通じて緩やかにつながり、互いの違いを認め合いながら共に生きる社会を築く意義を、改めて問い直す必要があると考えたからです。

大会プログラムでは、このテーマを多角的に深める時間を共有いたしました。共同通信社の半沢隆実氏による特別講演「分断と砲弾の時代どう乗り越えるか」では、現場の視点から現代社会の課題を鋭く切り取っていただき、平和への道筋を考える貴重な示唆をいただきました。また、ウクライナからの留学生や中学生、高校生平和大使ら、次代を担う若い世代を交えたトークセッションでは、国境や世代を超えた対話の可能性を肌で感じるひとときとなりました。

そして、本交流会の要(かなめ)とも言える「事例発表」については、第1回大会の開催以来、私たちは数多くの事例発表を通して、地域の垣根を越えて課題を共有し、熱心な協議を積み重ねてまいりました。この伝統を受け継ぐ本大会においても、関東近県各地から12の実践事例が発表されました。今回は、学校・家庭・地域の連携やコミュニティ・スクールの推進はもとより、スポーツを通じた地域づくり、特別支援教育、若者の社会参画など、多岐にわたる分野からの発表がなされました。それぞれの現場で展開される地道な「人づくり」や「地域づくり」の営みは、明日への希望を紡ぎ出す確かな力であることを再確認する機会となりました。

現在、国の中央教育審議会においても、誰一人取り残さない共生社会の実現や、日本社会に根差したウェルビーイングの向上が謳われ、地域コミュニティの基盤を支える社会教育の役割に、かつてないほどの期待が寄せられています。今年度より会場となりましたこの茨城県水戸生涯学習センターが、関東近県で社会教育・生涯学習に携わる皆様の新たな「対話の拠点」となり、ここから生まれたネットワークと知見が、各地の地域課題解決に向けた大きな駆動力となりますことを確信しております。

結びに、本大会開催にあたり多大なるご支援とご協力を賜りました、茨城県教育委員会、関係都県教育委員会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、そして貴重な実践を発表して下さった事例発表者の皆様をはじめ、本大会に関わってくださった全ての関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会 実行委員長 長谷川 幸介

2 大会テーマ及び日程

- 大会テーマ 分断を乗り越え、共に生きる社会へ
～生涯学習からはじめる平和と多文化共生の探求～
- 趣 旨 人づくり・つながりづくり・地域づくりに取り組んでいる関係者が一堂に会し、実践発表等を通して相互交流を図る。
- 共 催 茨城県教育委員会、茨城県生涯学習・社会教育研究会、茨城県水戸生涯学習センター
茨城県社会教育委員連絡協議会
- 主 管 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
- 後 援 福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会
- 協 力 国立教育政策研究所社会教育実践センター、茨城県教育庁社会教育主事会
茨城県市町村配置社会教育主事会、茨城県社会教育人材ネットワーク、
NPO 法人ひと・まちなっとわーく、NPO 法人インパクト、NPO 法人日本スポーツ振興協会
公益財団法人茨城県教育財団
- 日 時 令和7年12月12日(金)～13日(土)
- 会 場 茨城県水戸生涯学習センター
- 対 象 本大会の趣旨に関心のある方
(生涯学習社会教育関係職員、学校教育関係者、NPO 法人職員、CS 関係者、大学生、高校生等)
- 大会日程 第1日目(午後) 13:30～17:00
・オープニング
・事例発表(3事例×4会場)
・情報交換会
第2日目(午前) 9:00～12:30
・つながりづくりタイム
・講演「分断と砲弾の時代どう乗り越えるか 国際協調主義と日本の役割」
講師：一般社団法人共同通信社 特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実 氏
・トークセッション
「平和と多文化共生社会の実現に向けて
～未来のために今わたしたちができること～」
登壇者：平和・外国人支援・多文化共生に係る活動に取り組んでいる若者
(中学生・高校生・大学生等)3名程度
・クロージング

3 第 11 回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会参加者集約結果

都道府県	1 日目	2 日目	合計
茨城県	256	117	373
福島県	7	5	12
東京都	6	2	8
千葉県	4	1	5
栃木県	3	1	4
埼玉県	2	0	2
長野県	1	1	2
群馬県	2	0	2
合計	281	127	408

4 事例発表まとめ

第1会場(大講座室)

【事例発表1】「委員一人ひとりを生かすために～私のあがき、もがき～」(茨城県)

石岡市社会教育委員会委員長 平澤 正則 氏

石岡市社会教育委員会委員長 平澤正則氏より、「委員一人ひとりを生かすために～私のあがき～」をテーマに、社会教育委員会の現状と会議運営の改善、委員個人としての実践について発表があった。



石岡市社会教育委員は15名で構成され、その多くが各分野の団体長や副会長など、地域を代表する立場にある。個々の委員は高い指導力と経験を有している一方、委員会組織として主体的な活動を行うことは難しく、十分に力を発揮できていないという課題があった。

年間事業は市・新治地区・県事業を含め計8回の参加機会があり、従来は年2回の委員会開催が常態化していた。会議では事業計画・予算、事業報告・決算の説明に多くの時間を要し、委員同士の意見交換の時間が限られていた。

この課題を改善するため、第1回・第3回会議では、資料を会議1週間前までに事前配布し、当日の説明を簡略化した。各課からは課題提示を行い、それに対して委員が意見や提言を行う形式としたことで、発言時間が確保され、議論の活性化が見られた。

さらに、年2回開催に加え、12月に第2回会議を新設し、委員相互の理解を深める場を設定した。この会議は、各委員が自身の活動や思いを発表し、質疑を行うことで、背景を共有し、その後の議論に生かすことを目的とし、委員が各自の社会教育に関する思いや所属団体の取組等を発表し、相互理解を深める試みが説明された。

一方で、限られた会議回数や多忙な委員の実情を踏まえると、組織としての活動には限界がある。そのため、委員個人として「調査研究」や地域活動に主体的に関わり、社会教育委員の立場を生かした実践を行うことも重要であるということが、平澤氏が実践している豊富な具体例をもとに紹介された。

本事例からは、組織としての活動が難しい場合でも、委員個人が社会教育委員として主体的に調査研究や地域活動に関わることの意義が述べられ、会議運営の工夫と個人の実践を両輪とし、

社会教育委員の役割を地域づくりに生かしていくことが求められるという参考情報が提供された。

【協議・質問要約】

平澤氏の発表を受け、協議・質問では主として、①委員会運営の効率化と討議の質の向上、②委員の発言を引き出す仕掛け、③年 2 回開催の限界と補完策、④委員個人の活動と委員会活動の関係性、⑤若年層の参画可能性の観点から意見交換が行われた。

まず、会議時間の大半が事務局説明に費やされ討議時間が確保しにくい状況は多くの自治体でも共通課題であり、資料の事前配布徹底と当日説明の簡略化により討議時間を確保する方法は有効であるとの認識が共有された。加えて、各課が課題を提示し委員が提言する形式は、委員が事前に論点を整理したうえで参加でき、発言のハードルを下げる効果が期待されると整理された。

一方で、提言が毎回類似しやすいこと、提言しても直ちに解決に結びつかない場合があること、事務局側の資料作成負担が増えること等、運用上の課題も確認された。委員側が「すでに事務局が把握しているのでは」と感じて発言をためらう場面が生じ得る点については、論点設定や進行（委員間の意見交換を促す設計）が重要であるとの方向性が示された。

また、委員の個人活動と委員会活動の接続について質問があり、「個人の熱心な活動を社会教育委員会として集約していくのか、今後の展望を知りたい」との問いに対し、現時点で具体的な仕組みや明確な見通しは定まっておらず、「まずはやってみて、その都度、関係者に確認しながら進めたい」との回答が示された。これを踏まえ、個々の実践を委員会として共有・可視化し、次の議題化や提言につなげるための運用設計は今後の検討課題として整理された。

さらに、若い世代との関わり方について質問があり、委員の選任方法との関係で「公募により若年層を取り入れられる可能性がある」との見解が示された。若年層参画に向けては、選任方法の工夫に加え、役割の明確化や参加しやすい議題設定、発言を促す場づくり等の条件整備が必要であるとの観点が共有された。

総括として、限られた開催回数の中でも討議時間を確保し、委員の多様な経験を生かすためには、事前準備（資料配布・論点整理）と当日の進行設計（委員間の議論を中心に据えること）が鍵となること、あわせて、個人の実践や若年層参画の糸口を委員会活動にどう接続するかが今後の論点として確認された。

【事例発表2】「コミュニティ・スクールにおける“大人の学び”を生かしたサポート制度の構築と地域学校協働活動の充実」（埼玉県）

埼玉県川口市立鳩ヶ谷中学校 校長 市川 重彦 氏

本事例では、「大人の学びを生かしたサポート制度の構築と地域学校協働活動の充実」をテーマに、市川重彦氏が前任校である埼玉県所沢市立松井小学校において、令和5年度から実施したコミュニティ・スクール（以下、CS）導入期からの取組について事例発表を行った。



所沢市では令和4年度から段階的にCS制度導入を進めており、松井小学校では令和5年度からモデル校として取組を展開してきた。同校区は自治会、公民館、児童館、学校図書館、放課後子ども教室など地域資源が比較的集積している一方、従来の協働活動が学校課題と十分に結びついていないという課題があった。そこで学校運営協議会の設置にあたっては、関係団体と丁寧な調整を行い、約2か月半をかけて委員を選出した。

協議会は「大人の探究学習」と位置付け、アンケート結果の可視化やグループ協議を取り入れた熟議を実施し、第1回の熟議では「あいさつの減少」「不登校児童の増加」という重点課題を抽出した。不登校支援をめぐるのは、地域住民も共に学ぶ必要性が共有された。

これを受け、不登校支援をテーマとした校内研修を開催し、多様な立場が学び合う機会を創出するとともに、「ふらっとサポーター」制度を立ち上げ、校内巡回や声かけ等を行う体制を整えた。

さらに、学校運営協議会は、地域行事やPTA活動等を横断的に調整し、多様な主体による協働を促進するとともに、地域と学校が協働で年間指導計画を作成するなど、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組を進めている。

一方で、課題としては、教職員の「地域との“連携・協働”に」係る意識向上、教育課程の編成の全教科への反映、地域行事の見直し等が挙げられた。

本実践は、CSを「制度導入」ととどめず、「大人の学び」を核とした地域づくりへと発展させた点で多くの参考情報が提供された。

【協議・質問要約】

発表後、学校と地域の関係性の構築方法と、取り組みの持続性に関する質問が中心となって協

議が行われた。

質問者からは、市川氏の実践から、学校と地域が主従関係ではなく、「お互いに関わることによって Win-Win となる同等の立場」にあることが見えたと高く評価し、主従関係では長続きしないという問題意識に基づき、以下の 2 点の質問が挙げられた。

1. 主従関係から同等関係へ移行するプロセス (Win-Win にするための秘訣)。
2. 取り組みを持続可能にするための秘訣 (校長交代後も継続させる方法)。

Win-Win 関係構築のプロセスについて、市川氏は、学校運営協議会委員を「お客さんではない」と位置づけることが極めて重要だと強調した。そのための具体的な秘訣として、「スリッパを用意しない」ことを挙げた。委員にスリッパを用意しないことで、委員は「自分で靴を持ってくる」ようになり、学校に自分の下駄箱がある状態となる。これにより、委員は「いつでも来やすい」環境が構築され、これが対等な関係作りに繋がると説明された。

教職員の異動に影響されない持続可能性の秘訣については、市川氏から、CS 制度においては、校長が交代した後も「地域住民の思いが続く」ことが何よりも重要であることが述べられた。

市川氏が異動後の状況について、新校長が安全面を重視し、第 1 回学校運営協議会で「学校の門を施錠しないか」という課題を議題にした事例を紹介した。この際、新校長が「自分の判断だけでなく、地域の方と一緒に考えた」点を評価し、学校運営や課題解決を地域全体で共有し、共に考える姿勢こそが継続の鍵であるとした。また、地域住民が主体となって立ち上げた「ふらっと (FLAT) サポーター制度」については、活動状況の変遷を話しつつ、「地域の方が始めた取り組み」であるため、「新しい形になって変えていく」だろうと、継続への信頼を表明した。

協議からは、CS 実践における成功は、物理的なサポートだけでなく、学校と地域が対等な立場で課題を共有し、共に学び、新しい形を創造していく関係性にかかっていることを示唆された。

【事例発表3】「人・地域をつなぐ 学びと交流 ～荒川区における学習・活動支援～」(東京都)

荒川区教育委員会事務局 教育総務課 兼務社会教育主事 中泉 理奈 氏

荒川区地域文化スポーツ部生涯学習課 生涯学習振興係担当係長兼

荒川区教育委員会事務局 教育総務課 社会教育主事 内田 暁生 氏

本事例は、東京都荒川区における「人・地域をつなぐ学びと交流」を軸とした生涯学習・社会教育行政の実践報告である。荒川区では、「学びによる生涯活躍のまち あらかわ」の実現を基本理念に、生涯学習推進計画を策定し、区民一人ひとりの学びを支援するとともに、地域で学び、活動する人材の育成と活躍を後押ししてきた。



その中核的な取組の一つが、地域の担い手育成を目的とした年間講座「荒川コミュニティカレッジ」である。本講座は、20代から70代までの幅広い世代が共に学び、「地域を知りたい」「人や地域とつながりたい」「地域に貢献したい」「なにかしたい」といった参加者の動機を尊重しながら、学びを地域活動へとつなげる仕組みとして機能している。また、講座修了後には、活動を見据えた学習支援も行い、専門職が相談に応じるなど、新たなコミュニティの形成と活動開始をサポートしている。行政としては、活動の趣旨整理や会場調整、関係機関との連携支援などを行い、主体的な運営は参加者自身が担っている。回を重ねる中で、参加者が紹介者となるなど、学び合いの循環が生まれている。

また、社会教育団体への支援として、活動費補助や運営支援、学習機会の企画・運営支援などを行いつつも、団体の管理ではなく、活動主体性を尊重し、同じ目的や課題をもつ人や団体がつながり、学び合える環境づくりを重視した取り組みが紹介された。例として、PTAの主体的な企画運営のもと、活動の楽しさや意義を再確認したイベントが挙げられ、地区を越えた保護者同士の交流や他団体との連携が生まれたこと、PTA活動への参画意識が高まり、地域行事や防災活動などへの広がりが見られたことなどが述べられた。

本事例は、行政が学習の場を提供するだけでなく、区民の学びと活動を丁寧に支え、つなぎ、広げていくことで、「知の循環」を生み出している点に特徴がある。継続的な関わりを通じて地域の土壌を耕し、人と地域が育ち合う社会教育の実践として、他自治体にとっても示唆に富む事例である

【協議・質問要約】

協議では、発表者の中泉氏と内田氏が会場内を歩き、参加者と直接意見交換や質問への対応する場面も見られた。

全体での共有では、参加者から、荒川区の人口規模の地域における社会教育を、中泉氏、内田氏の2名で推進しているところで、事例の裏側にある努力に深く理解し、この場で語り尽くせない話をあらためてうかがいたいと言う感想が述べられた。また、両氏が「社会教育を指導する人」を育てる「人作りの部分」に感銘を受けたと言う感想が述べられた。

また、進行役から、協議中に中泉氏に直接あった質問について紹介され、両氏から、全体へのフィードバックが共有された。中泉氏からは、荒川コミュニティカレッジのカリキュラムや内容を10年以上継続してきた秘訣として、2人の専門職の力だけではなく、「地域の方の声を聴く」「地域で活動している方と繋がって作る」「他部署と連携して作る」といったことが非常に重要であること、地域の方々との情報交換や意見交換を通してまたあらたな人材発掘につながるということが述べられた。このフィードバックからは、事業を継続させるためには、専門職と地域が互いに支え合いながら活動していくことが不可欠であるという点が示唆された。また、内田氏からも、地域の方との「つながり」が大切であり、「つながり」を保ちつつ、オープンなマインドで取り組み、様々な相談を受けられるようにすることが重要であるという意見が述べられた。

第2会場(中講座室)

【事例発表1】「スポーツを通じて赤城山をもっと楽しく、更に元気に！」(群馬県)

サミーエンデュランス 酒井 修 氏

発表者の酒井氏は、前橋市の外郭団体である公益財団法人のイベントアドバイザーとして、赤城山でスポーツイベントを通じた地域振興を目指す活動を紹介した。酒井氏はアイアンマン(トライアスロン)の専門家であり、前橋市長から「赤城山でトレイルランニングレースを復活開催させたい」という要望を受け活動を開始した。以前10年間続いた大会が、4年間止まっていた中での復活を目指した。



酒井氏は当初、山の中のイベントは「ルールがない」ため容易だと考えていたが、実際には一般道路を止めるよりも困難であった。山の中には明確な「山のルール」がなく、トレイルランニングに肯定的な人々だけでなく、トレイルランに反対する自然保護団体など、過去から山を守ってきたという認識を持つ人たちが多数存在したためである。

大会開催が困難な中、酒井氏は2020年頃からのコロナ禍を「追い風」と捉え、敷居を下げ、裾野を広げるための活動を実施した。具体的には、GPS機能を利用し、いつでもタイムを累積・競争できるハイブリッドマラソンや、スマートローラーと動画を組み合わせて赤城山を走る負荷と体験をバーチャルで再現するバーチャルヒルクライムを開催した。また、長距離レースの敷居を下げるために、親しみやすい赤城山トレイルリレーマラソンを国立赤城青少年交流の家の敷地を利用して開催した。

さらに、反対派である自然保護団体への対応として、トレイルランナーの意識啓蒙とマナー周知を目的とした赤城山トレイルランニングセミナーを始めた。また、山の中で山道保全活動(草刈りなど)を継続的に実施し、人気のないルート維持に努めた。これらの活動が実を結び、活動開始から4年目(2023年)にして、自然保護団体から活動が認められ、トレイルランニングレースの開催が可能となった。市からの要望もあり、100kmウルトラマラソンも同時並行でコースを検討し、開催に至っている。

第2回からは、観光振興という目的に沿って、山頂の赤城大沼をスタート・ゴールとすることが可能になった。酒井氏は、トレイルランニングが赤城山に健全に根付くことを目標とし、大会開催はその

ための手段であると強調する。一度大会を開催し、参加者に「生きがい」を提供した以上、継続していく必要があるという意識で取り組んでいる。大会を通じて、ボランティア、地元住民、選手それぞれが喜びや自己実現を見つけ、大会を楽しみにするようになることがイベントプロデューサーとしての役割であり、自身の活動を通じて生涯学習の意義を強く感じた。

【協議・質問要約】

継続性と後継者育成：松村氏（アジア大学） 酒井氏の活動によって青少年や親子層が関わるようになり、将来の後継者育成に繋がっていると評価した。また、「あるならあるなり、ないならなでなりのやり方」で、イベントを継続し、参加者の「生きがい」を奪わないことが重要であるという酒井氏の考えに共感を示した。

行政連携の課題と地域づくり：鹿島市の社会教育関係者 スポーツを通じた地域振興と行政の社会教育・生涯学習部門との連携の難しさが指摘され、もし連携が強化できればより有益になるとの意見が出た。また、受容する側（地域住民）が提供する側になるような「循環」が生まれると、地域が強くなるという見解が示された。

教育との連携の提案：酒井氏 現在の子どもたちが赤城山に登る機会が失われ、ふるさとへの誇りを持ちにくい状況にあるとし、教育部門との連携強化が必要だと応じた。例えば、特定の学年の子どもたちが必ず大会に出場するような機会を設けることで、大会側の活躍の場も増えると考えを示した。学校のグラウンドを地域に開放し、世代間交流を促すアイデアも提案された。

【事例発表2】「文化の担い手から地域の担い手へ～学校を核とした地域づくりに励む～」(栃木県)

栃木県芳賀町立東小学校 高久 誠 氏

高久氏は、学校を核とした地域づくりを目指し、町の伝統文化を教育活動に取り入れ、児童・生徒を「文化の担い手」から「地域の担い手」へと育成する実践を紹介した。この活動は、学校の教育目標である「ふるさとを思う子」の育成を目指し、学習指導要領に基づき年間指導計画に位置づけて行われており、地域住民の絶大な協力を得ている。

学校では、芳賀町の誇る以下の4つの共同芸能を積極的に活用している。

1 お囃子: 地域の祭りで演奏されるお囃子を5年生から指導し、地域のお囃子会の方々が熱心に協力している。

2 大々神楽(だいだいかぐら): 4年生の社会科の学習に取り入れ、地域の方が演じる。この活動を通じて、後継者不足に悩んでいた地域の方々に歓迎され、高学年の児童が下級生に教えるという仕組みを作り、担い手育成に貢献している。

3 生子蔵(のぶじぞう)盆踊り: 江戸時代から続く盆踊りで、運動会で東小学校のオリジナル歌詞の「東音頭」として踊られている。本祭では子どもたちがお囃子と盆踊りに参加し、地域行事に深く関わっている。

4 雅楽(雅楽会): 音楽の授業の一環として生演奏を鑑賞・体験する機会を設け、子どもたちが日本古来の音楽に触れる機会を提供している。

これらの活動は、児童・生徒に多大な影響を与えている。地域の方が講師として来ると、子どもたちは目を輝かせ、熱心に授業を受ける。発表の場で大きな拍手をもらったり、褒められたりする経験を通じて、自己肯定感が高まり、学校生活全般にわたる自信につながっている。

高久氏は、以前の中学校での柔道部指導の経験から、子どもたちには勉強や運動の能力だけでなく、社会に出て「信用」され、人から頼りにされ感謝される「幸せな人生」を送れるようにと願っている。伝統文化活動や地域行事への積極的な参加を通じて、子どもたちは自然と大人たちの動きを見て手伝いを始め、社会性や協力する力を身につけている。



高久氏の描く未来は、町民が「顔馴染み」となり、災害時にも助け合える安心で強い地域を創ることである。卒業生が様々な職業に就いても、「ふるさとを思い、今生きる場所で心豊かに人と仲良く協力できる人」、すなわち「地域の担い手」になってほしいと願っている。高久氏は、自身がいつ異動しても活動が継続できるよう、地域と連携し、年間の指導計画に伝統文化活動を位置づけ、連絡先などの情報をデータ化して共有する仕組みを構築している。

【協議・質問要約】

伝統文化の担い手不足：茨城県城里町や潮来市の社会教育委員から 少子高齢化による伝統文化の担い手不足、特に若者が伝統的な民謡や踊りから離れている現状が共有された。

学校を核とした後継者育成の有効性：高久氏の実践が、小中学校の教育を通じて後継者を育成する上で有効であるという認識が参加者間で確認された。

活動の継続性に関する質問：水戸市立双葉台小学校 柳瀬氏 高久氏が異動した場合の活動継続性について質問が寄せられた。

高久氏の回答(継続の仕組み)：高久氏は、高齢化が進む地域住民の「どうやって続けていったらいいか」という悩みを解決するため、学校の学習指導要領内の必ず当てはまる教材と地域文化を結びつける作戦をとったと説明した。また、子どもの憧れを引き出すため、「鬼滅の刃」を題材にした大々神楽の話をするなど、子どもを惹きつける仕掛けを作ったと述べた。さらに、自身がいつ異動しても大丈夫なように、地域住民と連携して年間の行事を計画に組み込み、連絡先などの情報をデータ化して、後任者に引き継げる仕組みを構築していると説明した。

【事例発表3】「障害のある子どもたちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進」（福島県）

国立那須甲子少年自然の家 企画指導専門職 塚本 健太 氏

塚本氏は、「障害のある子どもたちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進」をテーマに、インクルーシブな環境整備への取り組みを発表した。この活動は平成30年度末に「日常生活に困難さや生きづらさを感じている子どもたちに何ができるか」という問いから始まった。

那須甲子は、障害の有無や国籍、年齢などに関わらず、全ての人々がお互いの違いを認め合い、共に生きていくインクルーシブな社会を目指している。また、特別な支援や配慮を必要とする全ての人々（スペシャルニーズ）が体験できる施設を目指している。那須甲子としての目的は、地域や学校のニーズを踏まえ、障害のある子どもでも学びやすい環



境、そして誰でも利用しやすいユニバーサルデザインの青少年教育施設を目指すことである。

具体的な実践内容は、ハード面とソフト面の両方から展開されている。

- 1 情報発信のバリアフリー化: 施設にはスロープや多目的トイレ、バリアフリーベッドなど多くのバリアフリー設備がありますが、それを利用者にとって知ってもらうため、ウェブサイト上でバリアフリーバージョンの施設紹介動画を公開した。(字幕が付加)
- 2 野外炊飯プログラムの改善: 支援学校へのヒアリングに基づき、野外炊飯(カレー作り)の手順書を作成した。この手順書は、磁石を使って進捗を可視化したり、役割分担を明確にしたりすることで、子どもたちが「今何をすべきか」という困り感を減らす工夫がされている。これらの手順書や役割分担表は、ホームページで公開されている。
- 3 ボッチャのプログラム化: パラリンピック競技であるボッチャをプログラム化し、公式セットを購入した。体験を通じて、障害に対するイメージをポジティブに変化させること、そして友達と協力する中で自分と他者の違いを知ることができた。

成果として、支援学校との連携強化、利用者からの高い評価、そして作成した手順書が他の教育

施設でも利用されるという波及効果が挙げられる。

課題としては、バリアフリー対応の動画が一部に留まっていることや、手順書がカレー以外のメニュー（焼きそばなど）については未作成である点が挙げられる。塚本氏は、現在の取り組みはまだ「スタート」段階であり、動画の字幕にふりがなをふるなど、低学年の子どもにも配慮したさらなる改善が必要であると認識していると述べた。

【協議・質問要約】

ボッチャによるイメージ変化の詳細:佐野市立中学校の教員 ボッチャの体験が「障害へのイメージをポジティブにする」効果について、健常者の「他者へのイメージ」が変化したのか、それとも障害を持つ「自己へのイメージ」が変化したのか、具体的な質問があった。

塚本氏の回答:小学校 5・6 年生へのアンケート調査の結果、健常者の子どもたちが障害へのイメージを「プラスの方向」に転じたことが確認された。例えば、体験後には「できることはある」「その人らしさがある」といったポジティブな項目を選ぶ傾向が増えた。

ボッチャ導入の費用対策:質問者からボッチャセットが高価で予算が却下された経験が共有されると、塚本氏は、公式セットは高価だが、新聞紙を丸めてテープを巻くだけでもボッチャは可能であり、お金をかけずに始めることができると助言した。

情報公開:塚本氏は、作成したカレー作りの手順書やボッチャの活動マニュアル、アンケート結果を含む報告書など、全ての活動資料を那須甲子のホームページで公開しており、参加者が予算申請などに利用できることを伝えた。

第3会場(小講座室)

【事例発表1】「調査研究から広がる、まなびの輪～生涯学習センターとともに育む、つながりのカタチ～」(茨城県)

茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事 宮本 裕介 氏

茨城県水戸生涯学習センターの社会教育主事である宮本裕介氏が、「調査研究から広がる、まなびの輪～生涯学習センターとともに育む、つながりのカタチ～」と題して事例発表を行った。宮本氏は小学校、中学校教員を経て、生涯学習センター企画振興課の社会教育主事として3年目である。センターは「誰もがいつでもどこでも学び続けられる社会へ」を目標に、新たな学びとイノベーションを生み出すプラットフォームとして機能している。センターの主な機能には、生涯学習情報の提供、現代的課題解決への対応、人材・団体育成、関係機関との連携などが含まれ、SNSも活用して活動事例を紹介している。



調査研究は、地域課題が複雑化する中での主体的な参加の必要性と生涯学習の重要性に基づき実施された。目的は、センターの役割や関係機関との連携状況を調査し、地域課題解決に資する生涯学習のあり方を追求することであった。特に、センターが地域社会において中心的な役割を担い、新たな事業者、NPO、団体、行政を「つなぐ」ことができるかに焦点を当てた。

調査の結果、センターには多様な主体を繋ぐハブ機能としての役割が求められており、地域社会の発展に貢献できる必要不可欠な存在であるという結論が得られた。今後注力すべき3つの柱として、セカンドキャリア学習やAI対策講座を含む現代的課題へのチャレンジ、コCS研修に代表される地域リーダー育成の交流、そして、ボランティア講義から実践に繋げる若者トップランナー育成が挙げられている。

地域ニーズの調査では、高齢化と少子化への対応が共通して高く挙げられ、特に社会福祉協議会(社協)では貧困問題が非常に高い関心事であった。NPO法人の役割として、行政の行き届かないサービスに対し社会課題として向き合っているという意見も出ている。事業推進上の課題として、各機関・団体との連携・共同が40%と最も高く、特に学校と地域団体・人材とのマッチングの重要性が指摘された。教員経験を持つセンター職員が、学校との繋がりを活かして仲介できると考察さ

れている。

センターへの期待としては、今回の交流会のような事業等の事例に関する情報提供が最も多かった。一方で、県の生涯学習情報システム「茨城の生涯学習」の活用度と認知度が 20%と低いことが大きな課題であった。ヒアリング調査では、センターが関与することで若者会議による地域活性化プロジェクトや、外国人子どもの就労支援スタッフ要請講座の参加者である「フレンズ・サポーター」の自立化といった活動の広がりが確認されている。

【協議・質問要約】

センター活動の広域的な周知方法と、多様な主体を繋ぐハブ機能の強化策が中心的な協議テーマとなった。

笠間市教育委員会（教員経験者）からは、教員時代、生涯学習センターの存在は知っていても、学校側から利用する機会が少なかったという実態が共有された。特定の事業（おもしろ理科先生）の認知度は高いものの、生涯学習のサイトで調べる習慣はなかったと指摘された。解決策として、先生たちにセンターへ来てもらう機会を設け、CSと連携し、地域との「繋ぎ方」を伝えることが、認知度向上のポイントになるという提案があった。

水戸市社会福祉協議会（社協）からは、県南のセンターが活発な印象がある中、水戸センターの広域的な活動における役割分担についての質問がなされた。発表者の宮本氏は、水戸センターは地域課題に特化した県の指定事業として、主に現代的課題へのチャレンジ（セカンドキャリア学習、AI 対策講座など）、地域リーダー育成・交流（CS コーディネーター研修など）、そして若者トップランナー育成の 3 つをメインとしていると説明した。

NPO 関係者（龍ヶ崎市）は、鉄道会社などとの連携支援ができることに驚きを示し、活動したい団体は多いものの、どこに相談していいかわからないという実態があるため、周知の重要性を強調した。参加への一番の繋がり口は口コミであることから、研修会やイベントの情報を「ざっくりでいいので」提供し、気軽に紹介してもらえ環境を整えることが効果的であると提言した。NPOにとって、センターが学校や行政との繋ぎ役になってくれることへの期待は非常に高い。

【事例発表2】「教員経験をいかした社会教育の推進」(茨城県)

北茨城市教育委員会生涯学習課 課長補佐 小野瀬 美穂 氏

北茨城市教育委員会生涯学習課 課長補佐の小野瀬美穂氏が、「教員経験をいかした社会教育の推進」について発表を行った。小野瀬氏は、学校しか知らない教員生活から社会に目を向け、視野を広げたいという思いで主事講習を受け、中学校教員から社会教育主事(3年目)となったが、配置前は何をしていたといか分からず不安であったという。



北茨城市では令和5年に全15校中14校でCSを導入した。CS全校導入の初年度、小野瀬氏は通知作成や委嘱状作成といった事務的な作業に追われ、CSの実態や課題を把握できずにいた。そのため、自ら学校の校長や教職員に依頼し、学校運営協議会に参加した。その結果、CSの委員間の理解度に差があることや、協働活動における課題が明確になった。

教員経験を持つことで、学校の状況把握が容易になり、先生方との連絡調整や相談がしやすくなったことが、北茨城市の社会教育推進の大きな力となっている。小野瀬氏は、協議会や学校が前向きに取り組めるよう、先生方に負担をかけない環境整備に注力した。広報誌のCS記事についても、学校の事務的負担を減らすため、社会教育課で原稿を作成し、学校は構成の確認のみを行う形をとった。また、委員からの要望を受け、CS委員の理解度向上のため、今年度はCSマイスターを招いた研修会を実施し、参加者からはCSの意義を理解できたという意見を得ている。

具体的なCS活動として、校舎移転に伴い、地域と連携して避難経路を確認する避難訓練を実施した磯原中学校の事例が紹介された。さらに、社会福祉協議会と連携し学校教室内に交流サロンを設置して地域住民と児童の交流の場とした中郷第一小学校の取り組みも紹介された。

地域行事では、「童謡詩入選作品発表会」と市民主催の「音楽祭」を広い会場で同時開催するよう調整した。これにより、小中学生が市民の前で作品を発表する機会を得て、地域の方との交流や達成感、自信に繋がった。部活動の地域移行に関しては、小野瀬氏自身が地域クラブ指導者を務めており、顧問経験と指導者経験の両方から、スポーツ担当係に相談や情報提供を行っている。

小野瀬氏は、社会教育主事として人との繋がりから生まれる笑顔や発想にやりがいを感じている。今後は、繋がる場所や機会の提供、コーディネート力の向上、そして継続的なサポート支援を通じて、学校と地域の「架け橋」となることに尽力していくと述べている。

【協議・質問要約】

一般参加者からは、CS 導入が多忙な教員の会議や協議の負担を増やし、余計に忙しくなるのではないかという懸念が示されました。

また、CS 活動の最終目的について、成果を測る目標設定と検証を行うべきか、それとも「ただ繋がって連携していればいい」のが目的かという本質的な質問がされました。

発表者の小野瀬氏は、行政側が広報誌の原稿作成を担うなど、先生たちに負担がかからないよう最大限の支援を心がけていると回答しました。

目標設定については、成果を測る目標を定めており、第 1 回学校運営協議会で必ず「どう子どもを育てるか」を協議し目標を設定していると説明しました。

さらに、活動は成果が出たから終わりではなく、年 5 回の協議会で必ず振り返りを行い、継続・縮小・変更といった検証を実施することで、新しいことだけでなく、無くすところは無くし、変えていくところは変えるという見直しを徹底していると述べました。

ひたちなか市の職員からは、CS 制度の進捗と、学校間の格差が解消されているか、現在残る課題は何かという質問がありました。小瀬氏は、導入 3 年目だがどの学校にも課題は残っていると回答しました。格差については、元々連携が強かった学校はスムーズだが、中学校など時間的制約のある学校は体制を整え始めた段階であると説明しました。

残る課題は、「どうやって活動してくれる人材を集めたらいいか」というボランティア確保の課題などを始めとして、多様であると述べられました。CS は 3 年で完成するものではないという認識のもと、行政として何ができるかを相談しながら、コミュニケーションを大切にを進めていく方針を示しました。

【事例発表3】「鹿嶋市高校生会の活動について」（茨城県）

鹿嶋市青少年育成市民会議 事務局長 市田 信道 氏

鹿嶋市青少年育成市民会議 事務局長の市田信道氏が、市民会議と高校生会の活動を紹介した。市民会議は、昭和 54 年（1979 年）に中学生の事故を契機に、「地域の大人たちが子どもたちにもっと目を向けなければならない」という目的で発足した。



高校生会は、教員主導の「高校生文化のつどい」から発展し、茨城県全域の高校生イベント「ソーヤング」

の成功に刺激を受け、高校生が主体的な活動を行うため平成 16 年（2004 年）に発足した。これにより、高校生会は「自ら考えて行動する」を活動理念とした。

当初は国や県の補助金を得て、ヤングボランティア研修を中心に行われた。研修例には、小学生を連れて行った「川で馬と遊ぼう」（宿泊研修や救助訓練、乗馬体験など）、コミュニケーションの大切さを学ぶ「しゃべり場学習」（筑波大学 野性の森での宿泊学習）、霞ヶ浦での湖上研修ボランティア、森林利用体験学習（間伐材を使ったプランター作り）があった。

補助金が減少したため、平成 30 年（2018 年）以降は、活動の軸を地域におけるボランティア活動に移している。現在の主な活動として、少年の主張発表大会の司会・運営補助、公民館祭りでの子ども遊び（プラ板、スライム作り）の運営、社会福祉協議会による赤い羽根募金や福祉祭りの補助、地元ボランティア団体主催の子ども食堂やサマーキャンプの補助への参画などが挙げられる。

メンバー数は概ね 10～15 名で推移していたが、令和に入ってから増加傾向にあり、ボランティア活動への認知度が上がっていることが推測される。定例会は月 1 回、夕方に行われるが、高校生同士が LINE で調整して日を決めているため、比較的多くの生徒（約 15 人）が集まる。

市民会議は、高校生が安心して活動に取り組めるよう、相談しやすい環境作り、研修機会の提供、ボランティア先の安全確認を確実にし、学校や地域団体との連携の軸となる役割を果たしている。しかし、最大かつ深刻な課題として、高校生会を支援する市民会議のメンバー（大人）に年配者が多く、その育成・継承が難しいことが挙げられている。

市田氏は、市民会議は市民会費で活動しており、大規模事業は困難であるため、現在は地域ボランティア団体が実施する事業に高校生を派遣し、活躍の場を提供することが役割であると説明した。また、高校生が経験を積み、将来的に鹿嶋を離れても帰省時に市民会議に顔を出せるような環

境作りを目指していると述べた。

【協議・質問要約】

協議の中で、高校生会の参加者増加要因について、ボランティア認知度の上昇だけでなく、活動の場が幅広いため、活躍の機会が多いからではないかという意見が示されました。

日立市の参加者から、登録メンバー数に対し、常に活動する中心の生徒は限られているかという質問がありました。市田氏は、常に活動するのは7~8人程度だが、定例会は高校生同士がLINEで調整して日を決めるため、比較的多くの生徒(約15人)が集まると説明しました。

神栖市の参加者から、神栖市には高校生会がないため、立ち上げる際の周知方法について質問がありました。市田氏は、漠然と高校生を集めるのは難しいため、市のイベントなどに既に興味を持って参加している生徒に声をかけ、会を固めてから作るのが作りやすいと助言しました。

高校生会を支援する市民会議のメンバー(大人)に年配者が多く、その育成・継承が最大課題であることが改めて強調されました。市民会議の構成はPTA会長に頼る部分が多いことも指摘されました。高校生会への支援においては、相談しやすい環境の整備や、ボランティア先の安全確認、学校や地域団体との連携の軸となることが重要であると述べられました。

第4会場(共用会議室 A)

【事例発表1】「高校と地域の協働によるひとづくり～猪苗代高校での実践～(福島県)」

一般社団法人 Bridge for Fukushima 安齋 憲二 氏

沓澤 理恵 氏

一般社団法人 Bridge for Fukushima (BFF) の安齋憲二氏と沓澤理恵氏が、「高校と地域の協働によるひとづくり～猪苗代高校での実践～」と題し、これまでの活動とその成果について発表を行った。

BFFは、「今日より明日が、ちょっと良くなる社会」をビジョンに掲げ、「正解のない課題に挑む人材を創り続ける」ことをミッションとしている。設立は東日本大震災直後で、当初は緊急支援活動を行っていたが、2012年、福島高校のSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の生徒から「復興に邁進する大人を見て自分たちも何かしたいが伴走してくれる大人がいない」という相談があったことを機に、若者の人材育成事業へと軸足をシフトした。学校外での課題解決プロジェクトの伴走支援を行っていたが、その実績が認められ、福島県教育委員会からの要請などを受け、「総合的な探究の時間」の地域コーディネーターとして教育現場に入り、県内約20校に関わっている。スタッフのうち4名が社会教育士の資格を有している。活動例としては、県立高校の探究コーディネーター、地域みらい留学事業コーディネーター、農業高校向け経営マーケティングプログラム、教員研修、上海との交流事業などが挙げられる。福島高校 SSH の生徒が地域課題解決のために取り組んだ「うなぎ養殖プロジェクト」では、生徒の提案に基づき、団体がうなぎ養殖の許可を取得し、資金調達や、企業や大学との連携を担った。支援を受けた高校生たちは現在、社会に出て活躍しており、地域での新しい活動をリードする人材も生まれている。また、これらの卒業生が現役世代のメンターとして関わる「エコシステムの」な循環が形成されつつある。



猪苗代高校での実践は、総合的な探究の時間「猪苗代学」として実施されている。全校生徒51人と少人数の同校で実施されている「猪苗代学」は、猪苗代町と周辺地域を教科書とし、生徒が「自分自身にできることは何かを考え、学び、実行する」ことを目標としている。カリキュラムは、1年生の「知る学び」(インプット、フィールドワーク中心)、2年生の「ゼミ活動」(地域住民が講師として伴走)、3年生の「個人探究」で構成されている。「猪苗代学」の成功要因として、「失敗が学びにな

る」と信じられる土壌があることが強調された。また、様々な職業の地域の多様な大人たちが年間50人以上、熱意をもって伴走し続けている。地域側も生徒たちの真剣な姿勢に巻き込まれ、大人同士の学び合いや活動への協力が活発化しており、「大人も学び直しを始める」といった地域での学びの循環も生まれている。

【協議・質問要約】

協議・質問のセッションでは、主に地域の大人の巻き込み方と、団体（BFF）の役割について議論された。

・一つ目の質問：地域で活動を支援する大人たちへのアプローチ方法について

（回答）活動のスタート時から地域活動を行う「猪苗代研究所（いなラボ）」というグループ約10人がベースで関わっていた。その後は、高校の先生方が生徒と一緒にフィールドワークに出向き、地域の方と名刺交換をするなど、地域を知ることから関係が構築された。協力を依頼する際は、まず知っている人に声をかけ、難しければその人から他の人を紹介してもらうという紹介制が活用されている。また、地域の方（例：そばの会の会長）が学校に直接連絡をくれるなど、地域からの自発的な繋がりも増え、多様な経路で連携が広がっている状態であると説明された。

・二つ目の質問：学校とのつながりの広げ方と猪苗代高校での関わり方について

（回答）団体の横の繋がりについては、当初の福島高校 SSH をきっかけに、県内広域の高校生を集めた学校外での課題解決活動（プロジェクトベースラーニング）の実績を地道に積み重ねた結果、コCSや探究の時間導入の必要性などから、学校との連携が増えていった。猪苗代高校での関わり方については、現在で6年目になるが、開始当初は先生方の「失敗できない」という大きな不安を解消するため、総合的な探究の時間を全て団体側が引き受け、先生方とカリキュラムを共同で設計した経緯がある。現在では先生方が主導する部分が増え、団体は、先生が指導しにくい場面（例：計画的な進捗）での空気の切り替え役や、先生方の不安感を取り除く役割、すなわち隙間や段差を埋める役として機能している。

・参加者からの感想

この活動を通じて「第二の肩書きを作る」という社会教育の役割が具現化されている。「稼ぎ」の仕事だけでなく、「みんなの幸せを作る仕事」である「勤め」の側面をアピールする団体の活動は「むちゃくちゃかっこいい」と評価され、学校の先生方が「次世代を育てる」という勤めの側面を生徒に伝えられる点も社会教育の特質である。という感想が寄せられた。

【事例発表2】「世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つ たかまつ」(茨城県)

高松地区まちづくり委員会委員長 高本光祐 氏

鹿嶋市立高松公民館館長 加藤義浩 氏

鹿嶋市高松地区まちづくり委員会 委員長 高本光祐氏と鹿嶋市立高松公民館 館長 加藤義浩氏が、公民館を拠点とした「世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つ たかまつ」を目指す取り組みについて紹介した。

鹿嶋市では、地区公民館ごとに地域住民や団体で組織される地区まちづくり委員会が設立され、公民館事業の企画・運営を担っている。高松地区まちづくり委員会は 91 名が委員として加入し、4 つの部会に分かれて活動している。高松公民館は高松小中学校(施設一体型小中一貫校)と高松幼稚園に隣接する文教施設が集積した中心地に位置している。高松地区は、コミュニティプランの将来像を「世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つ たかまつ」と定め、活動を推進している。主な活動は 5 つの柱に基づいている。



1. 地域の歴史的財産、伝統文化の継承:地域の昔話や史跡を伝えるために「高松かるた」を活用した大会を毎年実施し、地域住民も参加している。また、かるた名所巡りウォーキングでは、児童生徒の意見を踏まえ、通学路のゴミ拾いも併せて実施し、地域美化活動にも繋げている。また、自治会で伝承が難しくなった伝統文化「木滝あんば囃子」を、地域が主体となって小中学生に指導し、体育祭などで披露することで継承を図っている。
2. 子ども(学校)と地域のかかわり:生徒数減少により単独開催が困難になった中学校体育祭と地区住民体育祭を合体させた合同体育祭を実施している。
3. 環境美化事業:通学路脇にコミュニティガーデンを整備する他、旧小学校の跡地の雑草対策として、園児・児童と地域住民が協力して「ひまわり迷路作り」を実施した。
4. 地域の防災、減災:東日本大震災での津波被害の経験から、津波や洪水を想定した避難訓練、避難所運営訓練を実施している。中学生が避難所運営の役割を担い実践的な経験を積んでおり、実際に津波警報発令時に中学生が避難所で職員

を手伝うという成果も見られた。

5. まちづくり事業などの情報発信：年 4 回広報誌を発行し、幼保小中連携の情報も掲載して各戸に配布している他、Instagram も活用し、事業への参加募集や実施状況などタイムリーな情報を発信している。

今後は、人口減少や自治会加入率の低下という課題に対し、地域の多様な資源や人材を掘り起こし、学校支援ボランティアなどを通じて住民が活躍できる場を増やし、地域活性化につなげていくことを目指している。

【協議・質問要約】

協議では、人口減少が進む中で 91 名もの委員を維持し、世代を超えた活動を活発に行う秘訣や、高いモチベーションの維持方法が主な焦点となった。

・一つ目の質問：高松地区まちづくり委員会が 91 名という大人数を維持している点について（苦勞や方法など）

（回答）委員長の高本氏は、各地区から 2～3 名の活動推進委員を出してもらっており、1 年間の任期終了時に、委員会側から直接「一本釣り」で協力を依頼していると述べた。また、PTA 役員経験者や地域に住む若い市役所職員などにも声をかけ、若い人を登用する努力をしている。館長の加藤氏は、近年は 30 代から 40 代の若い世代が、横の繋がりを通じてお互いを誘い合い、活動に参加するケースが増えていると補足した。

・二つ目の質問：活動へのモチベーションの高さとその維持について

（回答）加藤氏は、公民館側で大きな方針は定めるものの、具体的な活動内容は各部会（委員）の自主性を尊重して計画してもらうことで、主体的な活動を促している。公民館側は、予算や計画についてのアドバイスを行い、委員が活動しやすい「雰囲気作り、場作り」に努めていると述べた。

また、高本氏は、「子どもをイベントに取り込む」ことが、親世代の参加を促す上で非常に有効であると指摘した。子どもたちが様々な活動に参加するようになると、親たちは「子どものため」に集まってくる傾向がある。公民館の職員や館長が、低い目線で子どもたちと「一緒に遊ぼう」という姿勢で接することが、若い世代の参加を呼び込む鍵となっている。

・参加者である鹿嶋市の社会教育委員を務める地元住民の声（質疑応答の補足として）

地域特性による協力的な風土：高松地区はかつて「高松村」という独立した地域であり、地域内の結びつきが非常に強く、温かい協力的な「風土」が残っているという補足説明があった。この地域の特性に加え、行政側や公民館長、委員長がその風土を活かして上手く活動を牽引していることが、まとまりのある要因であると総括された。

【事例発表3】「公高連携～設置者の違いはハードルか?～」(千葉県)

千葉県立八千代東高等学校 校長 遠山 宗利 氏

千葉県立八千代東高等学校 校長 遠山宗利氏が、「公高連携～設置者の違いはハードルか?～」をテーマに、県立高校と公民館の「連携」の難しさ具体的な事例について発表を行った。

遠山氏は、高校と公民館の関わりは、多くの場合、対等な関係ではなく、誰かが誰かをサポートする「協力」であり、共通目標のもと計画的・組織的・継続的に動く「連携」ではないと指摘。「公高連携」が進まない主な背景として、①設置者の違い(県立高校は県、公民館は市町村)による人事交流の欠如や事務手続きの煩雑さ②教員の多忙感、一部の教員は地域活動に全く関心がないのが実情であること③社会教育との接点が薄いこと④都市部の高校は地元率が低く地域との接点が薄いこと の4つが要因として挙げられた。



遠山氏が以前勤めていた薬園台高校と薬円台公民館は徒歩5分という近さにもかかわらず、ほとんど連携がなかった。連携のきっかけは、遠山氏が社会教育出身者であったことに加え、積極的な公民館長と、遠山氏が社会教育主事講習で関わったことのある事業担当者がいたという「人のつながり」であった。

連携事例のポイントは、高校で普段行っている活動や特色(園芸科)を活かしたプログラムを公民館の「主催事業」として実施したことである。具体的には、「寄せ植え教室」(園芸科の生徒が指導)は公民館の参加者が高校に出張して実施し、「理科実験教室」「書道教室」などは高校生と教員が公民館に出前授業として出向いた。

この連携の成果として、地域住民からの好評、高校の地域認知度向上、高校生の達成感・自己肯定感の向上が挙げられた。生徒は「親や先生ではない第三の大人」と交流することで成長している。

一方で課題は、教員の負担増(引率・連絡業務)や、定期テスト期間と重なるなど日程調整の難しさが挙げられた。

遠山氏は、今後の展望として、高校におけるCO・CSの推進には公民館の力が不可欠であり、公民館には高校を巻き込むような地域コーディネーターとしての役割を期待していること、公民館を高校生の社会参画・キャリア教育の場に活用できないかと述べた。また、高校は地域連携に不慣れであ

るため、社会教育の側から積極的にアプローチし、具体的なメリットを宣伝してほしいというメッセージが送られた。

【協議・質問要約】

協議・質疑応答では、高校生が講師となる事業の実施方法、現在の学校での連携の状況、教員の社会との交流促進に関する課題について議論された。

・一つ目の質問：高校生が講師となる事業の実施方法（実施場所と時間帯）について

（回答）遠山氏は、寄せ植え教室は資材の関係で参加者が高校に来てもらったが、その他は高校生と教員が公民館に出前授業として出向いたと説明した。高校生の参加については、教員の負担軽減のため、夏休み期間中の平日など、生徒が通常の授業時間帯に活動できる形式をとった。寄せ植え教室は、園芸科の授業の一環（実習）として実施した。

・二つ目の質問：現任校（八千代東高校）での地域連携の状況について

（回答）遠山氏は、「正直、今は何もやっていません」と回答した。以前の学校と異なり、特徴が少ない中堅の学校は地域からのオファーがない。しかし、特徴のない中堅校ほど地域に愛されることが生き残りに不可欠であると強調した。以前行われていたゴミ拾いなどの活動は、コロナ禍や働き方改革の影響で途絶えてしまったため、今後はスクールソーシャルワーカーを介して、社会福祉協議会や NPO などと、まずは「協力」レベルから連携を進めていきたい考えを示した。

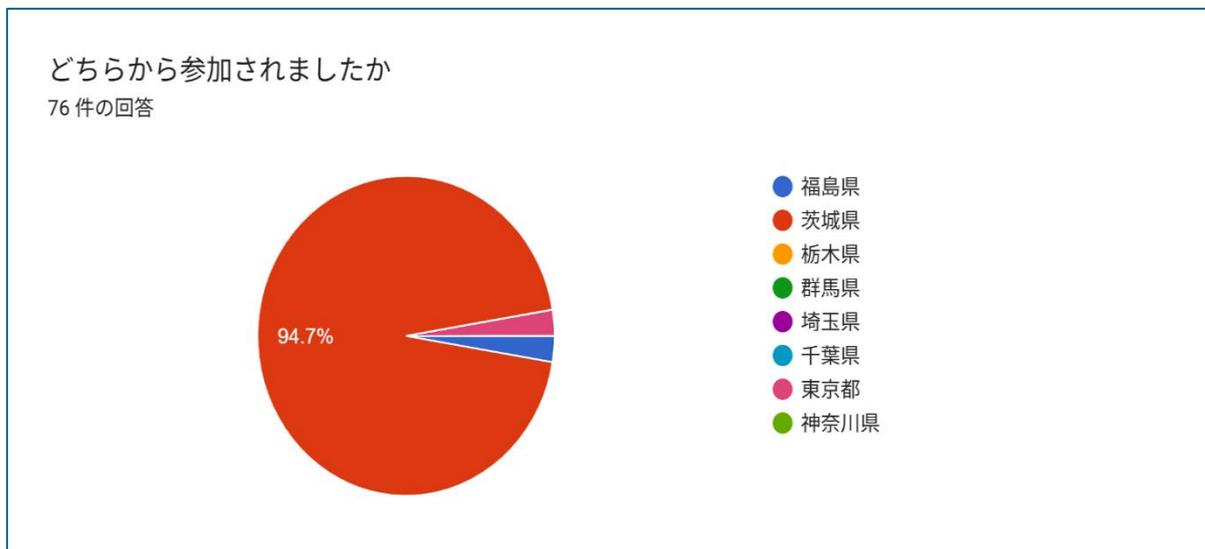
・三つ目の質問：高校生だけでなく教員自身も学校外の大人との交流が少なく、管理職からも外部活動への参加に否定的な意見が出ることもある。教員が外部に出るための工夫について

（回答）遠山氏は、この問題に対し、運動部の顧問など既に地域や実業団との繋がりを持つ先生方（社会教育的感性の高い方々）の事例を広げることや、就職指導担当など企業とつながりのある先生たちに「それは社会教育なんだ」と認識させることで広がる可能性があると提案した。また、過去に子ども会活動などに携わっていた先生方を発掘することも有効だと述べた。さらに、地域活動への参加を敬遠しがちな教員に対しては、地域連携によって「先生方が楽になる」「生徒が伸びる」といった具体的なメリットを形にして提示することが不可欠であると結論付けた。

5 アンケート集計結果

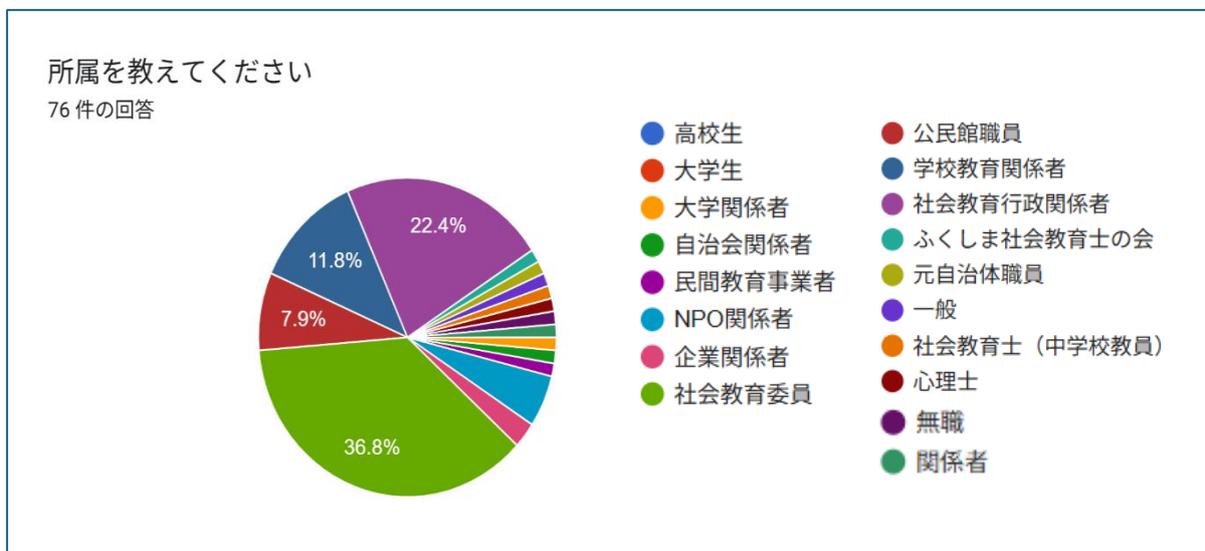
アンケート回収数 76 名

(1) どちらから参加されましたか



茨城県 (72)、福島県 (2)、東京都 (2)

(2) 所属を教えてください

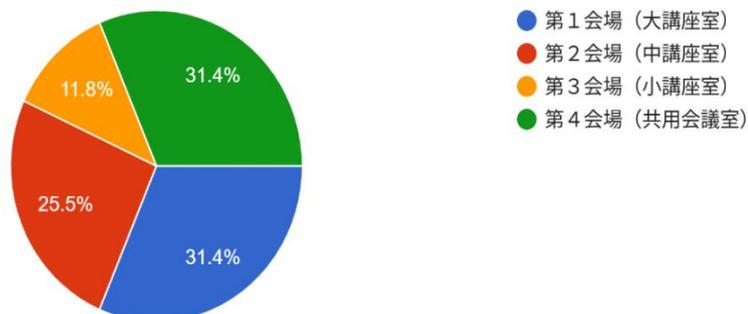


社会教育委員 (28)、社会教育行政関係者 (17)、学校教育関係者 (9)、公民館職員 (6)、NPO関係者 (4)、企業関係者 (2)、一般 (1)、ふくしま社会教育士の会 (1)、大学関係者 (1)、自治会関係者 (1)、民間教育事業者 (1)、元自治体職員 (1)、無職 (1)、社会教育士 (中学校教員) (1)、心理士 (1)、関係者 (1)

(3) 事例発表

3 事例発表 (1日目) ① 14:00~14:45 会場

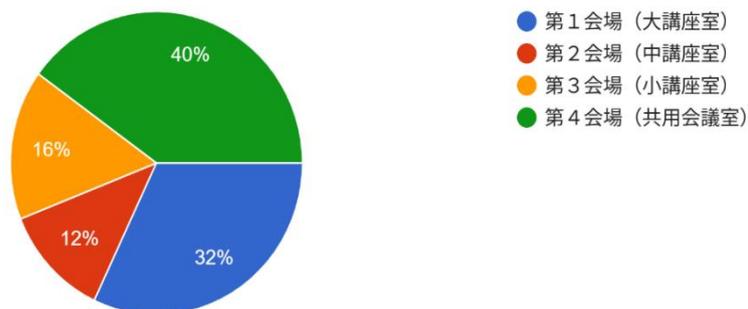
51 件の回答



第1会場(16)、第2会場(13)、第3会場(6)、第4会場(16)

3 事例発表 (1日目) ② 15:00~15:45 会場

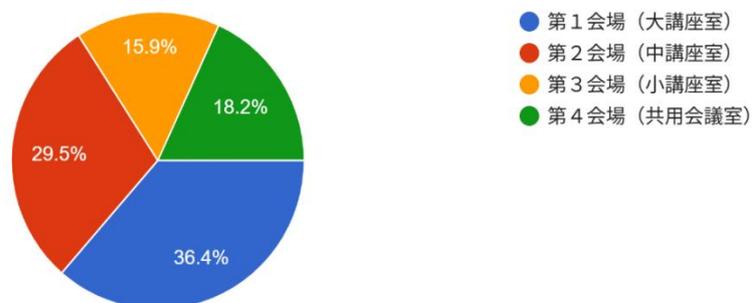
50 件の回答



第1会場(16)、第2会場(6)、第3会場(8)、第4会場(20)

3 事例発表 (1日目) ③ 16:00~16:45 会場

44 件の回答



第1会場(16)、第2会場(13)、第3会場(7)、第4会場(8)

ア 第1分科会(大講座室)

事例発表①(14:00~14:45)

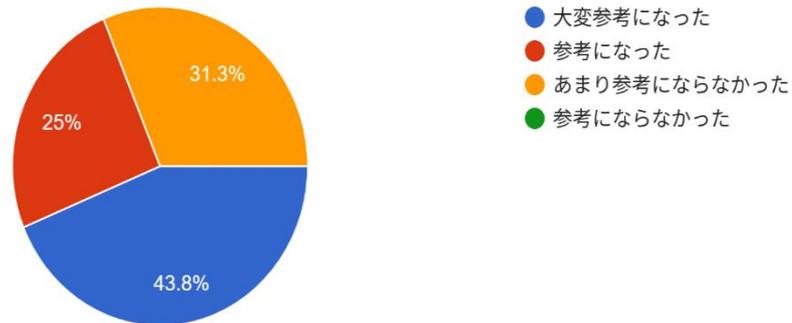
テーマ:委員一人ひとりを生かすために~私のあがき、もがき~

発表者:茨城県社会教育委員連絡協議会理事 石岡市社会教育委員会委員長

平澤 正則 氏(茨城県)

事例発表①(14:00~14:45) 第1会場(大講座室)

16件の回答



大参考になった(7)、参考になった(4)あまり参考にならなかった(5)

- ・ 社会教育委員として直面する課題を本音で話してくれて良かった。
- ・ 社会教育委員の担当としてとても勉強になりました。
- ・ 他市町村と比較をしてみた…
- ・ 同じような悩みを抱えている。委員も事務局も変わろうとする気持ちを持つことが大切。
- ・ 参加者同志が話し合えて良かった。
- ・ 平澤先生の提言は「その通り」社会教育委員の考えがもう少し行政に通れば「変えられる」と思った。
- ・ 情熱が感じられた。大人の大会(子どもは6km)奨励賞を考えたらと思った。
- ・ 委員1人1人を生かそうとする姿勢がよかった。



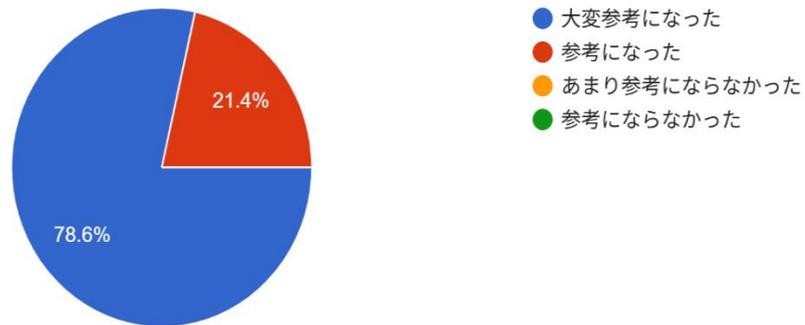
事例発表②(15:00~15:45)

テーマ:コミュニティ・スクールにおける“大人の学び”を生かしたサポート制度の構築と地域学校協働活動の充実

発表者:埼玉県川口市立鳩ヶ谷中学校 校長 市川 重彦 氏(埼玉県)

③事例発表②(15:00~15:45) 第1会場(大講座室)

14件の回答



大変参考になった(11)、参考になった(3)

- ・ 校長として「改革なければ前進なし」の姿勢が伝わった。
- ・ 市川先生のパワフルな講義に元気とやる気をもらいました。
- ・ 勢いを感じた。勢いのある個人の力に頼らざるを得ない現状だと思う。
- ・ 大変良かったです。
- ・ コミュニティの必要性を感じる。これから継続した取り組みになる。
- ・ すばらしい。我が市にも来てほしい 神栖市
- ・ CSで終わることなく、地域支援協働活動の実践例を聞いて良かった。
- ・ 明るくパワフルで力がわきました。
- ・ 地域が子どもを育てるといふ熱い思いが伝わりました。
- ・ CSはなかなか進んでいない事業なので参考にしたい。
- ・ CSの参考になりました。



事例発表③(15:00~15:45)

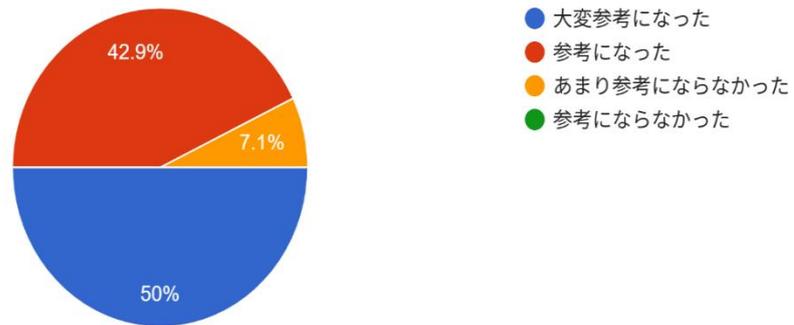
テーマ:人・地域をつなぐ 学びと交流 ~荒川区における学習・活動支援~

発表者:荒川区地域文化スポーツ部 生涯学習課生涯学習センター

荒川区教育委員会事務局 教育総務課 兼務社会教育主事 中泉 理奈 氏(東京都)

事例発表③(16:00~16:45) 第1会場(大講座室)

14件の回答



大変参考になった(7)、参考になった(6)あまり参考にならなかった(1)

- ・ 行政としての目線ではなく、区民と対等の立場で活動しているのが良かった。
- ・ 同じ行政職として社会教育を担当する者として大変勉強になりました。
- ・ 興味を持たせる工夫が長く続いたと考えられると理解したい。
- ・ 東京でも地域が結びついて楽しそう。
- ・ 地域のPTAのつながりができた事はよかったですね。
- ・ 地域と生涯学習課との密接な関係作りが大切です。
- ・ 実態に合った活動、サポートが大切だと感じた。



イ 第2分科会（中講座室）

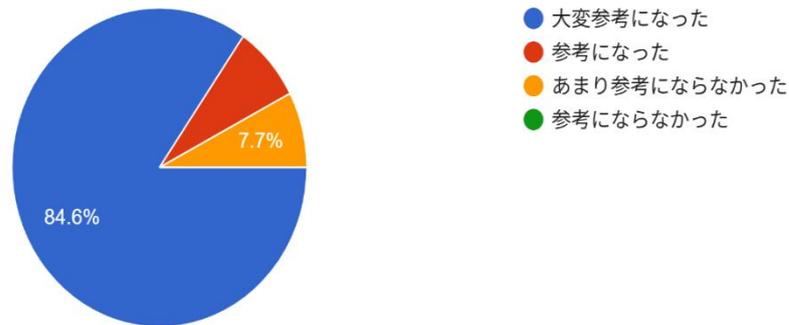
事例発表①（14:00～14:45）

テーマ:スポーツを通じて赤城山をもっと楽しく、更に元気に!

発表者:サミーエンデュランス 酒井 サム(修)氏(群馬県)

事例発表①（14:00～14:45） 第2会場（中講座室）

13件の回答



大変参考になった(11)、参考になった(1)あまり参考にならなかった(1)

- ・ 実例の話がとても面白かったです。20 分の発表では短いかなと感じます。もっと深く話を聞きたいと思いました。
- ・ とても生き生きと活動の内容を話して下さり、励みになりました。
- ・ 赤城愛だな!発表の時間を増やしてほしい。
- ・ もう少し聞きたかった。
- ・ 事業に実際に携わり苦労された人の話が聞けて良かったです。
- ・ 地域の特色を生かして地域活性化を目指しているようだった。
- ・ 明るい話題でしたが、同じグループの方は「トレイルラン」って?になってました。
- ・ 行政として、予算が削られてゆく中で、「生きがいを奪う」という認識を新たに得られたことが良かった。「ないならないなりに」を念頭に置きたい。



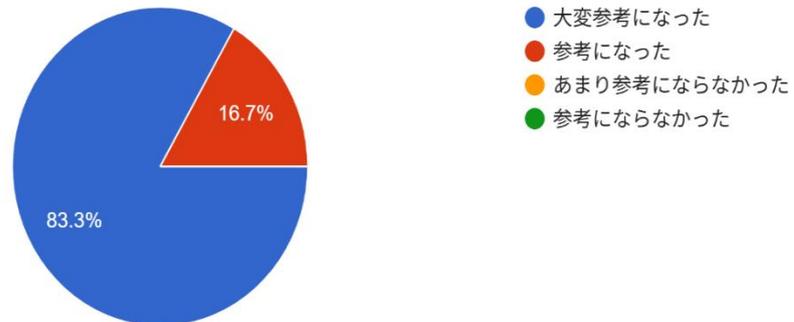
事例発表②(15:00~15:45)

テーマ:文化の担い手から地域の担い手へ~学校を核とした地域づくりに励む~

発表者:芳賀町立芳賀東小学校 教諭 高久 誠 氏(栃木県)

事例発表②(15:00~15:45) 第2会場(中講座室)

6件の回答



大変参考になった(2)、参考になった(4)

- ・ 地域の為、こういう人がいる事が大事ですね。(情熱のある先生大切です)今の若い先生にもみならってほしい。
- ・ 文化と地域の特性など、その地域ごとに異なるが熱意が素晴らしい。
- ・ 地域を大事にする人が、増えていくことがうれしいですね。
- ・ 地域の伝統芸能を大切に子ども成長に生かしていると感じた。
- ・ 情熱が素晴らしい。
- ・ 素晴らしい活動。



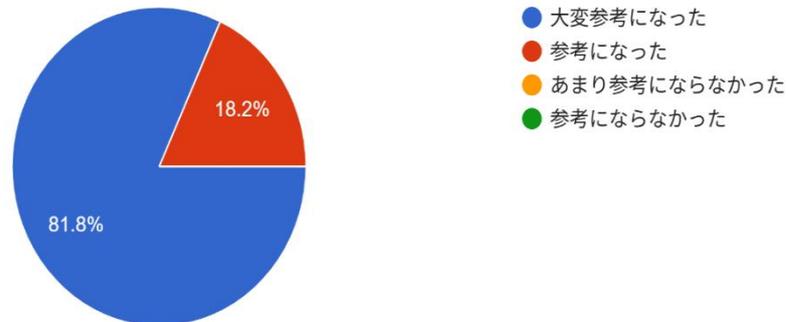
事例発表③(16:00~16:45)

テーマ:障がいのある子どもたちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進

発表者:国立那須甲子青少年自然の家 企画指導専門職 塚本 健太 氏(福島県)

3 事例発表③(16:00~16:45) 第2会場 (中講座室)

11件の回答



大変参考になった(9)、参考になった(2)

- ・ バリアフリーの具体的な取り組みと今後のアップデートについて聞いて良かった。
- ・ 障害者に対する配慮がわかりやすく参考になりました。
- ・ 成果、課題がしっかりしている。努力が伝わる。
- ・ 様々な人が利用できるように施設を整備・工夫がいると感じた。
- ・ 発表の工夫がわかりやすかったです。
- ・ 特別支援って実はみんなにやさしい。カレーのつくり方、経験のちがいもうめてくれそうです。



ウ 第3分科会(小講座室)

事例発表①(14:00~14:45)

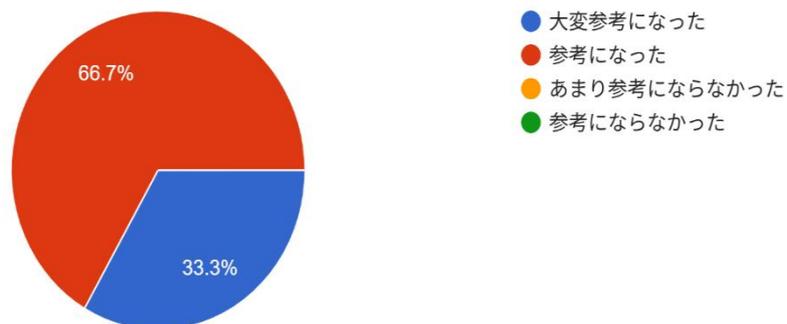
テーマ:調査研究から広がる、まなびの輪

~生涯学習センターとともに育む、つながりのカタチ~

発表者:茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事 宮本 裕介 氏(茨城県)

事例発表①(14:00~14:45) 第3会場(小講座室)

6件の回答



大変参考になった(2)、参考になった(4)

- ・改めて、生涯学習センターの存在意義を学ぶことができ良かった。
- ・学校との連携は、スタートがハードル高いと感じた。
- ・生涯学習センターのデータを見る事ができ良かったです。



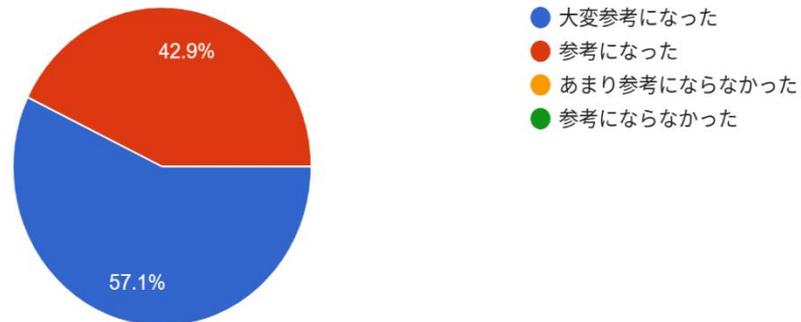
事例発表②(15:00~15:45)

テーマ:教員経験をいかした社会教育の推進

発表者:北茨城市教育委員会生涯学習課 課長補佐 小野瀬 美穂 氏(茨城県)

事例発表②(15:00~15:45) 第3会場(小講座室)

7件の回答



大変参考になった(4)、参考になった(3)

- ・ 北茨城市の CS 事例が知れたのが良かった。小野瀬さんの想いや目指す未来をもっと知りたいと思った。
- ・ CS について詳しく学べることができました。
- ・ 部活動地域移行に問題を感じている。



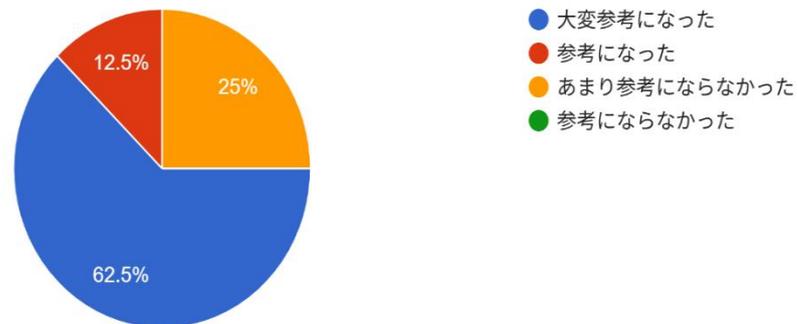
事例発表③(16:00~16:45)

テーマ:鹿嶋市高校生会の活動について

発表者:鹿嶋市青少年育成市民会議 事務局長 市田 信道 氏(茨城県)

事例発表③(16:00~16:45) 第3会場(小講座室)

8件の回答



大変参考になった(5)、参考になった(1)、あまり参考にならなかった(2)

- ・ 高校生会の変化がよくわかりました。高校生への熱い思いが伝わりました。
- ・ 高校生たちが主体的に社会貢献にとりくめる場をサポートできる組織があることは、とてもありがたいと思いました。
- ・ 高校生会の役割と活動が理解できた。
- ・ ボランティアのあり方むずかしいですね。



エ 第4分科会（共用会議室A）

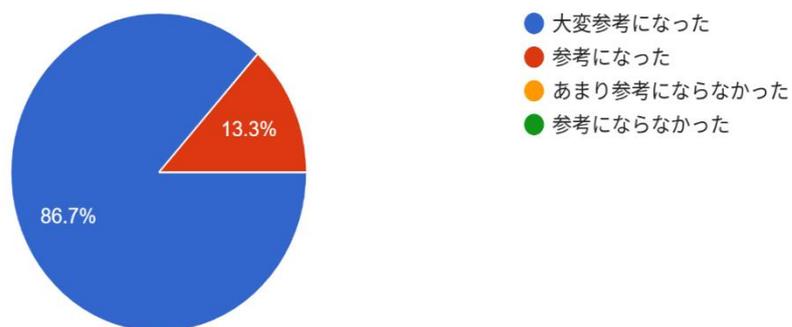
事例発表①（14:00～14:45）

テーマ：高校と地域の協働によるひとづくり～猪苗代高校での実践～

発表者：社団法人ブリッジフォーふくしま 安齋 憲二 氏 沓澤 理恵 氏（福島県）

事例発表①（14:00～14:45） 第4会場（共用会議室）

15件の回答



大変参考になった（13）、参考になった（2）

- ・ 失敗することこそ学びというコンセプトが真新しかった。
- ・ 探求での教員の負担感をポジティブになるよう支援しているのが素晴らしい。
- ・ 地域とのかかわり合い、学校との（先生）との意識の共有できればいいのですが。
- ・ 大人が巻き込まれる様子を興味深く伺いました。
- ・ 色々な方々が活躍できる場所があったり、子どもたちへの伴走の仕方もとても学ばせていただきました。
- ・ 社会教育士の活動がうまく機能していると思った。
- ・ 具体的な内容で、とても参考になった。
- ・ 高校生との関わりがとても楽しく、勉強になりました。
- ・ とても素晴らしい取組だなと思いました。地元でもできたらな…
- ・ 講師の安齋さん、沓澤さんの目指すもの、そのためにしている活動が大変素晴らしいと思いました。



事例発表②(15:00~15:45)

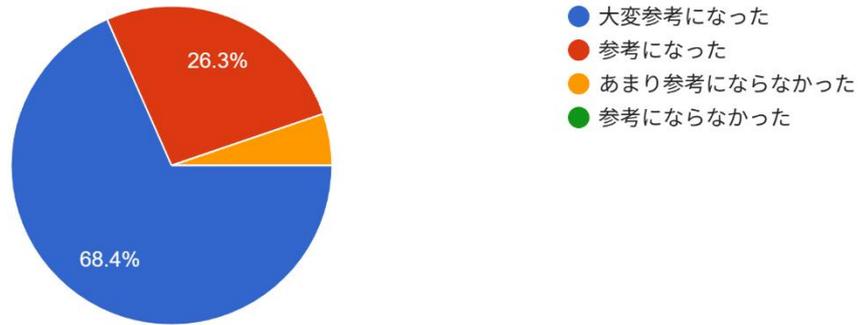
テーマ:世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つ たかまつ

発表者:高松地区まちづくり委員会 委員長 高本 光祐 氏

鹿嶋市立中央公民館 館長 加藤 義浩 氏 (茨城県)

事例発表②(15:00~15:45) 第4会場 (共用会議室)

19件の回答



大変参考になった(13)、参考になった(5)、あまり参考にならなかった(1)

- ・「社会教育の力」を感じた活動発表でした。
- ・すごい活動量でおどろきました。
- ・「まちづくり委員会」が公民館を中心によく活動している。
- ・地域の連携をうまく活かしていて良かった。
- ・地域と学校と公民館とても連携されていて、すごいなと思いました。幼・小・中・高を巻き込んで地域の方々、学校、公民館で育てていっている感じもすてきだと思いました。
- ・広報紙で「人の紹介」に着目しているところが新たな発見であった。芸座等、伝統芸能にも強みがある点が良かった。
- ・地域の活動が子どもから高齢者まで参加しているのがすごいと思いました。
- ・「よいもの」は、人がかわっても受け継がれていくのだと感じた。
- ・地域の取り組みに主体的に参加してもらうことの難しさを改めて感じた(他市からの質疑にて)子どもを巻きこんでいくことが活力を生むと思いました。
- ・地域連携の素晴らしい例を聞いて良かったです。
- ・地域によって特性がある。その特性を大切にしていることがわかった。
- ・地域の縁がうすれつつある今、これだけ地域が活性化していることがすごい。



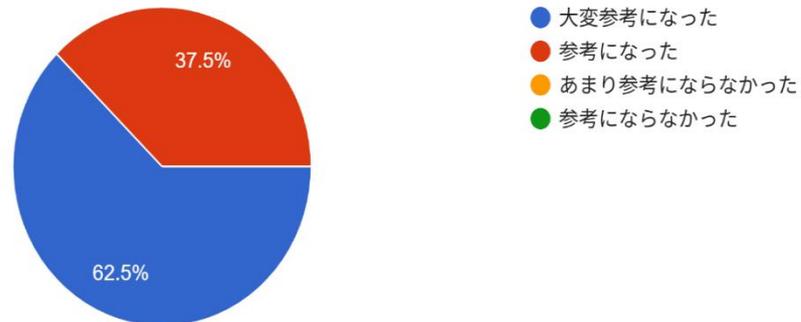
事例発表③(16:00~16:45)

テーマ:公高?連携 ~設置者の違いはハードルか?~

発表者:千葉県立八千代東高等学校 校長 遠山 宗利 氏(千葉県)

事例発表③(16:00~16:45) 第4会場(共用会議室)

8件の回答



大変参考になった(5)、参考になった(3)

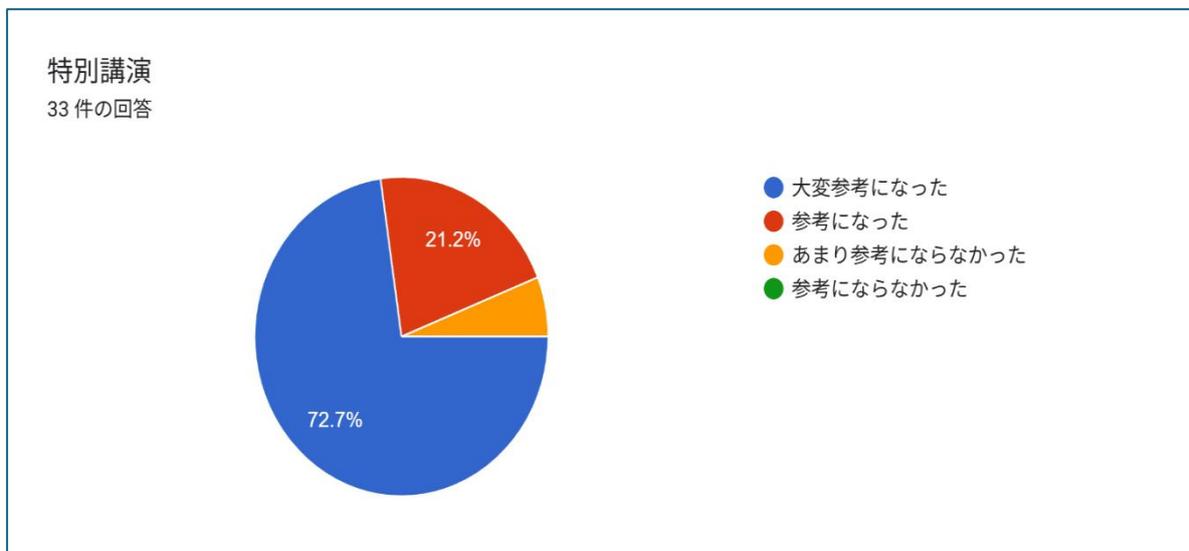
- ・ すばらしかったですし、勉強になった。
- ・ 高校と公民館の連携というありそうでない組合せや、高校が社会とつながる大切さに共感した。
- ・ ハード面の視点だけでなく、ソフト面での取組ももう少し聞きたかった。
- ・ 高校生が講師になるという発想がおもしろかった。



(4) 特別後援

テーマ:「分断と砲弾の時代をどう乗り越えるか 国際協調主義と日本の役割」

発表者:一般社団法人共同通信社 特別編集委員兼論説解説委員 半沢 隆実 氏



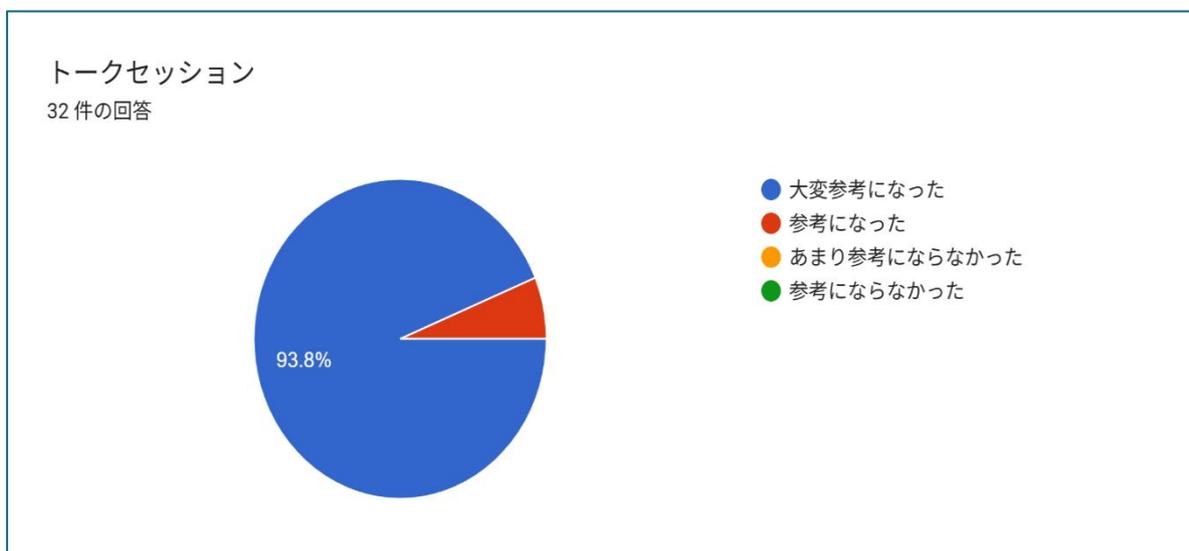
(5) トークセッション

テーマ:平和と多文化共生社会の実現に向けて～未来のために今わたしたちができること～

登壇者:日本国際学園大学経営情報学部3年 トロプチン・ニキタ 氏(茨城県留学生親善大使)

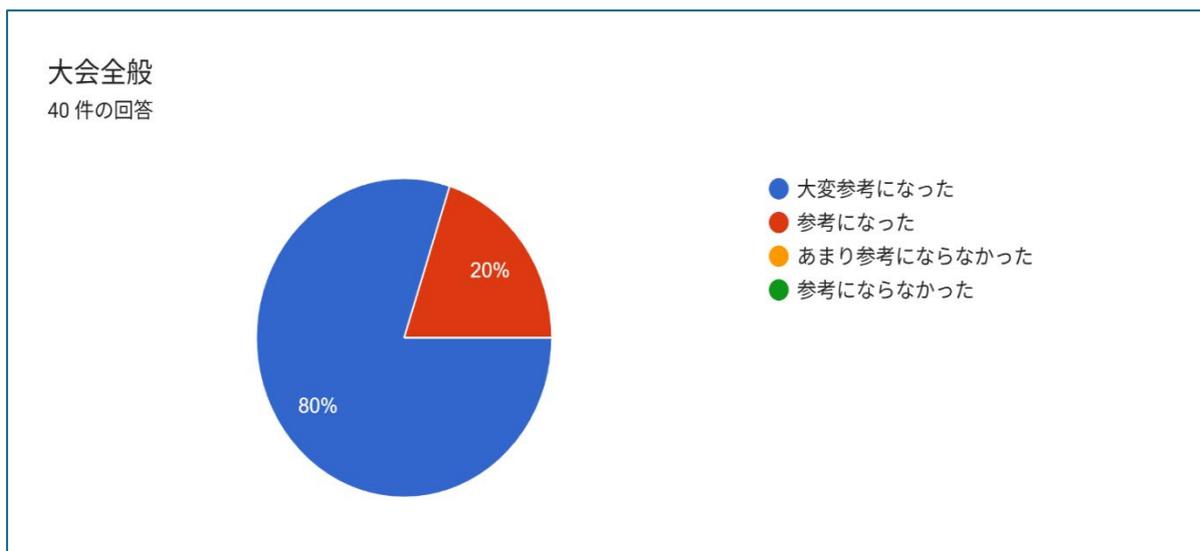
茨城県立水戸第一高等学校2年 中垣 美咲 氏(第28代高校生平和大使)

水戸市立常澄中学校2年 大場 星寧 氏(令和6年度水戸市平和大使)



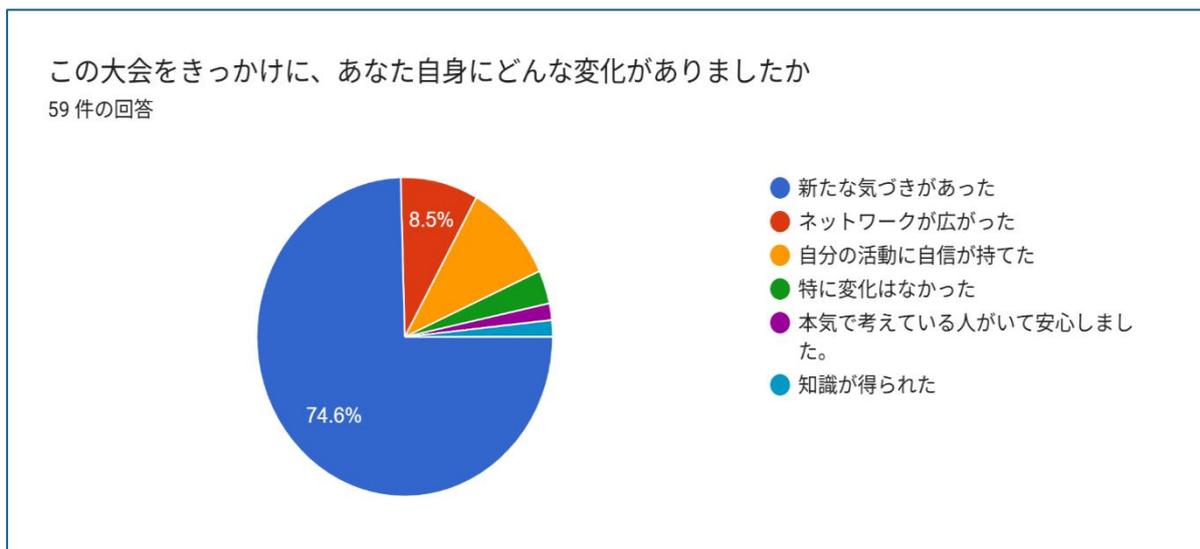
大変参考になった(30)、参考になった(2)、あまり参考にならなかった(0)

(6) 大会全般



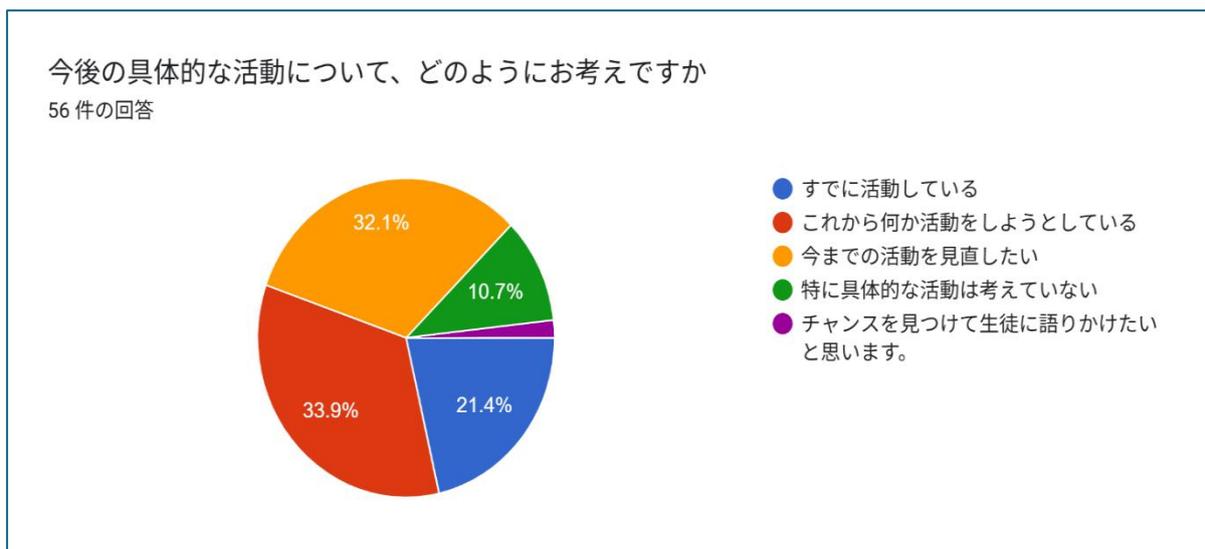
大変参考になった(32)、参考になった(8)

(7) この大会をきっかけに、あなた自身にどんな変化がありましたか



新たな気づきがあった(44)、ネットワークが広がった(5)、自分の活動に自信が持てた(6)、特に変化はなかった(2)、本気で考えている人がいて安心しました(1)、知識が得られた(1)

(8) 今後の具体的な活動について、どのようにお考えですか



すでに活動している(12)、これから何か活動をしようとしている(19)、今までの活動を見直したい(18)、特に具体的な活動は考えていない(6)、その他(1)「チャンスを見つけて生徒に語りかけたいと思います。」

9 その他お気づきの点がございましたら、ご意見ご感想をご記入ください。(23 件の回答)

- クロージングトークセッションがよかった。凡事徹底ですね。
- トークセッションの若者の言葉に刺激を受けました。子どもの権利条約、子ども基本法には、「子どもの意見の尊重」がある。若者の声に耳を傾けて、伴走していける大人でありたいと思いました。学校運営協議会のもち方についても、もっと子どもの意見を取り入れ、それを地域や学校の大人たちが伴走していくような取組にしていきたい。私は、そんな学校づくりをしたいと強く思いました。
- 大変お世話になりました。ありがとうございました。
- 社会教育主事だけでなく社会教育委員や一般の方も集団化していて、グループでの話し合いはなかなか難しいと思った。しかし、何も知らない社会教育委員や初めて社会教育を知った一般の方の声を聴くことができ、このようなごちゃまぜの交流もよいものだったと思った。学ばせていただきありがとうございました。
- 学校と地域の連携では、こどもの活躍を中心に据えることがポイントだと感じた。
- 水戸ホーリーホックの苦労話はきけましたが(これはこれでおもしろかったです)クローズセッションがあるのでこのようにアナウンスがあり、何もわからずのこってしまった。チラシなどで案内がもうすこしくわしく必要かと感じました。
- 会場内が教育関係者が多いので、一般の人がはいて聞くには違和感がありました。
- 大切なことは家庭教育である。それをフォローできるのが私たちと考える。将来のため、自分のためにも活動は有意義である
- 半沢さんのお話は、中々ニュース等みていただけでは分からない事など、多々知る事ができ非常に参考になりました。武力ではなく、対話の必要性を改めて実感できました。

- 選挙権を持たない 3 名のお話には心打たれるものがありました。と同時に、大人達の政治への無関心度合いの嘆かわしさを、痛感しました。
- 全体を通じて、排外主義ではなく 対話、相手を理解する事を基盤とする事が 1 番の平和への近道だと感じました。若い方々が強い思いで話されている姿がとても頼もしく感じました。ありがとうございました。
- 平和と多文化共生について、いろいろな角度から考える良い機会を頂きました。ありがとうございました。
- 2 日目のみの参加となりますが、見識を広げることができました。トークセッションでの皆様方のお話から体験から得られる学びは絶大だということ、また、社会教育の可能性を感じた次第です。体験から感じた思いは言葉にすることは難しく、体験はその人の生き方に反映されていくものだと思います。学校現場で多くの子どもに有意義な体験をさせること、また、自身も研修を通して地域と人との繋がりづくりに努めていこうと思います。
- 各会場の発表(①②③)がもう少しランダムでもいいのでは?②の時間帯で聞きたいなあと思う会場でも、同じ時間帯であったのが残念であった。今、社会教育会の活動が形骸化していると感じているところ(地域)は多いのではないのでしょうか。今後に役立てていきたい。
- 参加したい講話が重複したので残念でした。とても充実した交流会でした。ありがとうございました。
- 学びの深い貴重な会で、また参加したいと思いました。
- これからも本交流会を継続させていってください。
- これだけのイベントを無料で参加できるのがすごいです。また、ただ話を聞くだけでなく、参加者が当事者意識を持てるようディスカッションの時間を設けていることが、運営の皆さんが対話を大切にしようという思いが伝わってきました。ありがとうございました!
- 同じ課題を共有できて良かった。会の運営に感謝します。



6 特別講演

第2日目 9:30～

「分断と砲弾の時代をどう乗り越えるか、～国際協調主義と日本の役割～」

共同通信社特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実氏

はじめに:人類の理想が「息切れ」し始めた危険な時代

皆様、おはようございます。本日は「共生」という大きなテーマに沿って、私なりの視点をご提案できればと思います。

戦後 80 年、私たちは「世の中は常にいい方向へ進んでいる」と信じて生きてきました。特に冷戦が終わった 90 年代、世界は自由でリベラルな秩序に向かって一つにまとまってく、スベスベとした球体のような美しい世界だという認識を持っていました。しかし今、その理想は「息切れ」を起こし、世界はバラバラな方向へとひび割れ始めています。正直、こんな時代が来るとは思っていませんでした。私たちは今、向こう 10 年、20 年を乗り越えるための極めて危険なターニングポイントに立っているのです。



I. 世界を切り裂く「分断」と「4 つの戦争」

今、世界は地政学的な「活断層」によって引き裂かれています。

1. 秩序の崩壊と主要国の内向き姿勢

かつての世界を主導したアメリカは、トランプ政権以降、「アメリカだけが大事」という極端な国益第一主義に転じています。他国の利益を犠牲にしても構わないというこの姿勢は、戦後のリベラルな国際秩序を根本から揺るがしています。一方で中国は、猛烈な勢いで軍拡を進め、空母を次々と建造し、太平洋の西側からアメリカの影響力を排除しようとしています。台湾や日本列島を自国の勢力圏に置きたいという野心を隠さなくなっています。さらに、かつて「途上国」と呼ばれたグローバルサウスの国々が、新たな軸として発言力を強めています。

2. 私たちが直面する 4 つの深刻な危機

現在、特に注視すべき紛争・潜在的紛争が 4 つあります。

- ガザ戦争: イスラエルとハマスの衝突により、7 万人が犠牲となり、和平の柱だった「二国家共存」は今や死に体(仮死状態)です。これは遠い国の話ではなく、ホルムズ海峡などの物

流ルートを通じて、日本のエネルギー供給を直撃する死活的な問題です。

- ウクライナ侵攻: プーチン大統領の歪んだ過去への憧憬が生んだ、国際法違反の明白な侵略行為です。ウクライナが劣勢にあるという厳しい現実の中、収束の道筋は見えていません。
- スーダンの人道危機: 実は今、地球上で最も悲惨な状況はアフリカのスーダンにあります。数百万人が難民となり、人間が耐えうる限界を超えた過酷な環境に置かれていますが、世界はこれを見過ごしてしまっています。
- 台湾海峡の緊張: 中国は 2027 年までに武力侵攻の能力を持つと見られています。これは日本の「生活圏」の問題です。いたずらな挑発行為を避けつつ、現状をいかに維持させるかという、冷静な計算が求められています。

3. 日本の防衛予算と安全保障の現実

日本も GDP 比 2% への防衛費増額を決めましたが、ワシントンの安全保障サークルでは「3%や 3.5% は当たり前、台湾は 10% 必要だ」という議論すらあります。しかし、その財源はどうするのでしょうか。私たちの医療、教育、インフラを削ってまで数字を追うのか。安全保障の論理だけで突き進むことの危うさを、私たちは直視しなければなりません。

4. 宗教的対立と格差という地下水脈

分断の背景には、宗教という「火に油を注ぐ」強い力があります。インド・パキスタン間や、かつての北アイルランド・ベルファストに見られる高い「壁」での分断、そして 9.11 テロ。これらは人間の憎悪を増幅させます。また、アメリカのブルッキングス研究所のデータを見ると、その国の富の大部分を、たった「上位 10%」の人たちが独占するようになっているという驚くべき事実が分かります。この格差が固定化・加速化しており、日本ももはや格差の大きい国の一つとなっています。

II. 変容する社会と「共生」の苦い教訓

世界を根底から変えているもう一つの大きなテーマは「人の移動」、つまり移民・難民問題です。

1. メルケル元首相の「人道主義」とその反動

2015 年、トルコの海岸に打ち上げられたシリア難民の 3 歳の男の子の写真が世界を震撼させました。ドイツのメルケル首相は、ホロコーストへの深い贖罪意識から「我々はできる」と難民受け入れを決断しました。彼女は、グローバル化によって「遠くの危機」はもはや国内政策と切り離せない

ものであると見抜いていたのです。

しかし、その善意は激しい反動を呼びました。早すぎた、多すぎた受け入れは、パリでのテロ事件や治安の悪化を招き、ヨーロッパ各地で移民排斥を唱える極右政党の台頭を許してしまいました。

2. 文化摩擦という現実の壁

デンマークでは、給食から豚肉を排除するよう求める移民との間で摩擦が起き、スウェーデンでは移民が受け入れ国の男女平等という価値観を否定するといった事態も起きています。民主主義や自由という価値観そのものが、内部から揺さぶられているのです。

3. 日本における「不都合な真実」

日本の難民認定数は、他国に比べ極めて少ないのが現状です。一方で、日本でも「外国人は社会保障のタダ乗りだ」という感情的な議論がありますが、そこには「不都合な真実」があります。データを見れば、外国籍住民が医療費に占める割合は人口比よりも低く、実際には彼らの方が負担を多くし、経済を支えている側面があるのです。

III. 日本の役割：国際協調主義の火を絶やさないために

日本は今後、多民族化を受け入れる「共生」を目指すのか、それとも「文化的な鎖国」を目指すのか、大きな岐路に立たされます。

1. 「離婚できない夫婦」としての隣国外交

中東で学んだ教訓は、隣国とは「離婚できない夫婦」だということです。日本と中国も、どれほど嫌い合っても場所を移ることはできません。感情を排し、いかに戦争をせずに同じ屋根の下で暮らすかという、冷徹な計算に基づく外交が必要です。いたずらに挑発するのではなく、裏での交渉も含めて落とし所を見つける工夫が求められます。

2. ミドルパワーの連携と日本の強み

現在、国連は大国間の対立で機能不全に陥っています。だからこそ日本は、イギリス、カナダ、オーストラリアといった、信頼できる「ミドルパワー」の民主主義国家とネットワークを築くべきです。日本には、和の精神や宗教的な柔軟さといった独自の強みがあります。この強みを生かし、国際協調主義を再構築する役割を果たすことができるはずです。

おわりに：壮大な実験の先へ

かつて、アフリカを出たホモ・サピエンスがヨーロッパでネアンデルタール人と出会ったように、「異質な者同士が出会い、やがて同化していく」ことは、人類が 5 万年以上繰り返してきた生存の形でもあります。今、私たちが直面している文化の摩擦も、この長い歴史の一部で、人類史的な壮大な実験と言えるかもしれません

日本は今後、多民族国家になっていくという道筋を辿らざるを得ないでしょう。その際、ヨーロッパでの反動や失敗を「教訓」として胸に刻み、感情を排して一歩ずつ進んでいく必要があります。大国が自分勝手に振る舞い、リベラルな秩序がひび割れる今こそ、日本が「国際強調」の立て直しに貢献できる余地は大きい。私は、そう楽観的に信じています。

本日は、短い時間でしたが、本日はありがとうございました。



7 トークセッション

「平和と多文化共生社会の実現に向けて—未来のために今わたしたちができること—」

日本国際学園大学経営情報学部3年 トロプチン・ニキタ氏(茨城県留学生親善大使)

茨城県立水戸第一高等学校2年 中垣 美咲氏(令和7年度高校生平和大使)

水戸市立常澄中学校2年 大場 星寧氏(令和6年度水戸市平和大使)

本トークセッションでは、中学生・高校生・留学生という異なる立場の若者が、それぞれの体験をもとに「平和」と「多文化共生」について語り合い、未来に向けて私たち一人ひとりができる行動について考えました。世代や国籍を超えた視点からの発言は、「平和が決して遠い概念ではなく、日常と深くつながっていること」を示してくれました。



【柱1】わたしたちが歩んできた「平和への道」

司会: まずは、自己紹介と併せて、皆さんがどのように『平和』に関心を持ち、どのような活動をされてきたのかを伺います。

中学生: 皆さんは、「平和」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。私は、広島平和大使として平和記念式典に参加するまで、平和は教科書の中にある言葉だと思っていました。しかし、実際に広島を訪れ、原爆資料館で展示を見たとき、その考えは大きく変わりました。写真や遺品から伝わってくる苦しみは、言葉にできないほど重く、戦争は決して過去の出来事ではないと感じました。原爆ドームを目の前にしたとき、「この場所は、私たちが忘れてはいけない歴史そのものだ」と強く思いました。平和は当たり前にあるものではなく、私たちが守り続けなければならないものだ、皆さんにも伝えたいです。

高校生: 私は水戸市の平和大使として、広島や長崎を訪問し、さらに国連などで活動を発信する経験をしました。その中で強く感じたのは、地域によって平和について学ぶ機会に差があるということです。広島や長崎では、戦争や原爆について考えることが日常にありますが、他の

地域では、どうしても表面的な理解にとどまりがちです。だからこそ、知るだけで終わらせず、署名活動など具体的な行動につなげることが大切だと思うようになりました。皆さんにも、「知ったその先に、どんな行動ができるか」を考えてほしいです。

大学生(留学生):私はウクライナから来て、日本で生活しています。祖国では今も戦争が続いており、日本に来た当初は、戦争のない日常がまるで別の世界のように感じられました。日本で講演をする中で、ウクライナについてあまり知られていない現状にも気づきました。戦争は、武力だけでなく情報によっても進められます。だからこそ、正しい情報を伝え続けることが、平和への大切な行動だと考えています。皆さんにも、ニュースをそのまま受け取るだけでなく、「それは本当なのか」と考えてほしいです。

【柱2】異文化と世界に触れて見えたこと

司会:続いて、異文化や世界との関わりを通じて得た学びについて伺います。これまでの活動を通じて感じたことや、ご自身の中で変化したこと(考え方や価値観)はありますか？

高校生:国連などで発信する中で、私は「伝え方」の難しさを学びました。日本は被爆国ですが、同時に過去には加害の歴史もあります。そのことを理解しないまま平和を訴えると、相手を傷つけてしまうこともあります。自分の正しさだけを主張するのではなく、相手がどう感じるのかを考えることが大切です。皆さんにも、誰かに思いを伝えるときには、相手の立場を想像してほしいです。

大学生(留学生):日本で暮らす中で、日本人とウクライナ人は文化や歴史は違っても、大切にしている価値観はとても似ていると感じています。家族や故郷を思う気持ち、責任をもって物事に向き合う姿勢は共通しています。世界は今、大きく変化しています。その中で、多様な文化とどう共に生きていくのかを、皆さんと一緒に考え、行動していきたいです。

中学生:広島での平和記念式典で、外国の方から声をかけられたことがあります。言葉は完全には通じませんが、「ここでは本当に悲しいことがあったんですね」という思いは伝わってきました。そのとき、平和を願う気持ちは国や言葉を超えるのだと感じました。皆さんにも、平和は日本だけの問題ではなく、世界みんなの問題だということを知ってほしいです。

【柱3】私たちにできる平和へのアクション

司会：では、平和で多文化共生の社会を実現するために、今の私たちにできることは何でしょうか？

大学生（留学生）：平和や多文化共生を難しくしているのは、私たちの中にある思い込みや偏見です。その壁を越える一つの方法が、言語を学ぶことだと思います。自分の母語や文化を大切にしながら他者の言葉を知ること、相手を理解しやすくなります。皆さんにも、知らないことを恐れず、学ぶ姿勢を持ち続けてほしいです。

高校生：私は、同世代の皆さんに「行動してほしい」と伝えたいです。もちろん、知ることは大切です。でも、行動しなければ社会は変わりません。一つの意見に固執せず、さまざまな視点を知った上で、自分の意志をもって行動することが重要です。若者の行動は、想像以上に大きな影響力を持っています。

中学生：私が考える平和へのアクションは、とても身近なところにあります。学校で友達と意見が違ったとき、相手を否定するのではなく、「そういう考え方もあるんだ」と受け止めることです。小さなことかもしれませんが、そうした積み重ねが、平和な社会につながると信じています。

【柱4】未来へ託すメッセージ

司会：最後に、皆さんが未来に向けて大切にしたい思い、これからの社会に託したいメッセージを伺いたいと思います。

中学生：私は、戦争や核兵器のない世界で生きてみたいです。そのために、学び続け、平和の大切さを伝え続けたいです。子ども世代の声にも耳を傾けてほしいです。

高校生：武力ではなく、言葉で互いを尊重し合える社会を築きたいです。対話をあきらめないことが、本当の平和につながると信じています。

大学生（留学生）：未来の世代には、私たちの世代が犯した過ちを繰り返さないでほしいです。そのためには、常に真実を求め、自分の頭で考え続けてください。

このトークセッションを通して、平和と多文化共生が特別な誰かの課題ではなく、会場にいる私たち一人ひとりの選択と行動によって形づくられるものであることを、改めて教えてくれました。

8 クロージングトークセッション

茨城県水戸生涯学習センター 次長兼企画振興課長 鈴木 昭博 氏

茨城県生涯学習社会教育研究会事務局長 大月 光司 氏

株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック代表取締役 沼田 邦郎 氏

このクロージングトークセッションでは、茨城県水戸生涯学習センターの鈴木次長の進行のもと、大月先生と沼田取締役のお二人を迎え、これまでの歩みを振り返り、未来への活力を共有する時間となりました。



1. 草の根の「対話」への回帰と大会の歩み

鈴木： 皆さん、2日間本当にお世話になりました。今回の第11回大会は、昨年度までの全国大会規模から一転し、第1回や第2回大会のような「草の根の活動者が集まり、地域課題を対話を通じて共有する場」という原点に立ち返ることができました。昨日から各会場で繰り広げられた熱い議論、そして今日の学生さんたちによるグローバルな視野からのメッセージを受け、私たち大人も「負けていけない、何とかしなくては」という強い刺激をいただいたのではないのでしょうか。

大月： ご紹介いただきました大月です。私が事務局長を務める茨城県生涯学習社会教育研究会は、設立から16年になります。今回の会場の廊下の光景を見たとき、茨城大学で開催された第1回大会の熱気を思い出し、ようやく対面で集まれる場所に戻ってきたのだと感慨深く感じました。コロナ禍においては、大会を途絶えさせないためにオンラインやオンデマンドを駆使して継続してきましたが、やはりこうした顔の見える「対話」の場こそが私たちの活動の源流です。

2. 水戸ホーリーホック：どん底からの人間教育と地域密着

鈴木： さて、今回のゲストである沼田取締役が関わる水戸ホーリーホックですが、悲願のJ1昇格を決め、地域に大きな勇気を与えてくれました。クラブミッションである「人が育ち、クラブが育ち、街が育つ」という理念は、私たちが目指す社会教育の「人づくり、つながりづくり、地域づくり」と深く響き合うものです。

沼田：ありがとうございます。私が 2008 年に社長に就任した当時は、まさにどん底からのスタートでした。名刺を渡しても「ホーリーホックって誰？」と言われるほど認知度が低く、前社長の不祥事もあって、地域の信頼はゼロでした。私の本業である鞆屋「バンビ」の名前を出さないと学校の校長先生にすら会ってもらえない、そんな時代だったのです。

そこから私たちが最初に取り組んだのは、戦術よりも何よりも「徹底した人間教育」でした。挨拶や規律を守るという当たり前のこと、いわゆる「凡事徹底」を選手やスタッフに叩き込みました。イメージを保つため、茶髪や髭も禁止にしました。また、私自身が「ホーリー君」を連れて元旦マラソンを走ったり、地域のお祭りを何軒もはしごしたりして、まずは私という「人間」を地域に知ってもらう「ドブ板活動」を死に物狂いで続けました。

3. 「地域に利用される存在」を目指して

鈴木：震災の際にも、選手たちが自らボランティアに駆けつけたと伺っていますが、その時の思いをお聞かせください。

沼田：2011 年の東日本大震災は、クラブにとって存続の危機でしたが、同時に「地域に何ができるか」を問い直す転機となりました。選手たちを総動員して大洗への物資運びやマッサージ、サッカー教室を行い、「地域への恩返し」を最優先しました。かつては「プロだから応援してくれ」という傲慢な姿勢があったかもしれませんが、私たちは「地域の方々にはホーリーホックを利用してもらい、共に成長する」というスタンスに切り替えたのです。

学校教育の現場にも飛び込み、子どもたちに挨拶や自転車の止め方といった基本の「き」を教えました。今では、県内の小中学生が毎日 10 万個飲む「ホーリーホック牛乳」が給食に出るまでになりましたが、最初はマスコットを見て「牛乳が来た」と言われるほど苦勞の連続でした。

4. これからの 10 年に向けた展望とメッセージ

鈴木：最後に、これからの社会教育、そしてホーリーホックが目指す未来についてお二人から一言お願いします。

大月：これから先の 10 年も、大切なのは「これまで通り活動を続けていくこと」です。茨城県内の隅々で自主的に活動している有志の皆さんを繋ぎ、その輪を広げていきたい。また、今後の大会では成功事例だけでなく、「こうやったけれど上手くいかなかった」という失敗の経験を率直に語り合える場にしたいと考えています。それこそが、次に続く活動者にとって一番の学

びになるからです。

沼田：私たちはJIという新しいステージに挑みますが、ホーリーホックを地域の経済や教育を発展させるための「ハブ（拠点）」として最大限に活用してほしいと思っています。皆さんの「推し活」の対象となり、生活の一部になれるよう、地域に根ざした活動をさらに加速させます。私たちは鹿島アントラーズさんのようなビッグクラブと違って、非常に「ハードルが低い」のが売りです。講演でもボランティアでも、呼んでいただければどこへでも飛んでいきますので、ぜひ私たちのクラブを地域のために使い倒してください。

鈴木：ありがとうございました。今回の大会で得た繋がりやヒントを胸に、また来年の第12回大会でお会いしましょう。皆さま、2日間本当にありがとうございました。



参考資料

- ・チラシ1次案内
- ・チラシ2次案内
- ・実行委員会名簿
- ・事例発表運営スタッフ
- ・ボランティア(茨城県社会教育人材ネットワーク)
- ・日本教育新聞掲載記事

第11回 みんなで話してみんなでつくろう

第1次
案内

関東近県生涯学習 社会教育実践研究交流会



2025

12.12 金 13:30-17:00

オープニング、事例発表（4会場×3事例）

※ 17:30～情報交換会（有料）先着80名

12.13 土 9:00-12:30

○特別講演「分断と砲弾の時代どう乗り越えるか 国際協調主義と日本の役割」

講師：一般社団法人共同通信社 特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実 氏

○トークセッション「平和と多文化共生社会の実現に向けて」

～未来のために今わたしたちができること～（仮）

登壇者：平和・外国人支援・多文化共生に係る活動に取り組んでいる若者
（中学生・高校生・大学生等）

○クロージング

会場 茨城県水戸生涯学習センター

水戸市三の丸1-5-38 茨城県三の丸庁舎3階

問合せ Tel. 029-228-1313（平日9:00-17:00）

参加費 無料

どなたでも参加できます！

申込は、第2次案内で案内します

主管 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
共催 茨城県教育委員会 茨城県生涯学習・社会教育研究会 茨城県水戸生涯学習センター

関東近県生涯学習・ 社会教育実践研究交流会

第11回
大会

大会テーマ：分断を乗り越え、共に生きる社会へ
～生涯学習からはじめる平和と多文化共生の探求～

日時 令和7年 12月12日(金)～13日(土)

会場 茨城県水戸生涯学習センター
〒310-8512 茨城県水戸市三の丸1-5-38三の丸庁舎3F

参加費 無料 ※第1日目夜の情報交換会
は有料です。

対象 どなたでも参加できます！

- ・スーツでの参加は、できるだけ
ご遠慮ください！
ノーネクタイ・普段着での参加を
お願いしております！
- ・名札・名刺の持参をおすすめします！



大会の最新情報はホームページから！



茨城の生涯学習

共催 茨城県教育委員会 茨城県生涯学習・社会教育研究会
茨城県水戸生涯学習センター 茨城県社会教育委員連絡協議会
主管 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
後援 福島県教育委員会 栃木県教育委員会 群馬県教育委員会
埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会 神奈川県教育委員会
協力 国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター
茨城県教育庁社会教育主事会 茨城県市町村配置社会教育主事会
NPO法人ひと・まちなっとわーく NPO法人インパクト
NPO法人日本スポーツ振興協会 公益財団法人茨城県教育財団
茨城県社会教育人材ネットワーク



「第11回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会」の開催にあたり一言ご挨拶申し上げます

今回は「分断を乗り越え、共に生きる社会へ～生涯学習からはじめる平和と多文化共生の探求～」をテーマといたしました。社会の分断が懸念される今だからこそ、私たち一人ひとりが学びを通じてつながり、共に生きる社会を築くことの意義は計り知れません。2日目の特別講演や、若い世代も交えたトークセッションは、そのための大きな示唆を与えてくれるものと確信しております。

この交流会は、また、皆様の多様な実践知を共有し合う貴重な機会です。それぞれの現場で展開されている特色ある「人づくり」や「地域づくり」のご発表は、私たちに新たな気づきと勇気を与えてくれると思います。ぜひ、ご参加ください。

関東近県各地より、生涯学習・社会教育の実践に情熱を注ぐ多くの皆様にご参加いただき、二日間の活発な対話を通じて、新たな「つながりづくり」へと発展されますことを祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会 顧問 茨城大学名誉教授 菊池 龍三郎

第1日目
12/12 (金)

オープニング 13:30～

事例発表 ①14:00～14:45 会場は自由に移動
②15:00～15:45 していただけます
③16:00～16:45

※ 発表テーマ、発表者等については、変更になる場合があります。

第1会場（大講座室）

1. 委員一人ひとりを生かすために～私のあがき、もがき～
石岡市社会教育委員会委員長 平澤 正則（茨城県）
2. コミュニティ・スクールにおける“大人の学び”を生かした
サポート制度の構築と地域学校協働活動の充実
埼玉県川口市立鳩ヶ谷中学校 校長 市川 重彦（埼玉県）
3. 人・地域をつなぐ 学びと交流 ～荒川区における学習・活動支援～
荒川区教育委員会事務局 教育総務課
兼務社会教育主事 中泉 理奈（東京都）

第2会場（中講座室）

1. スポーツを通じて赤城山をもっと楽しく、更に元気に！
サミーエンデュランス、酒井 サム（修）（群馬県）
2. 文化の担い手から地域の担い手へ
～学校を核とした地域づくりに励む～
栃木県芳賀町立芳賀東小学校 教諭 高久 誠（栃木県）
3. 障がいのある子供たちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進
国立那須甲子青少年自然の家 企画指導専門職 塚本 健太（福島県）

第3会場（小講座室）

1. 調査研究から広がる、まなびの輪
～生涯学習センターとともに育む、つながりのカタチ～
茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事 宮本 裕介（茨城県）
2. 教員経験をいかした社会教育の推進
北茨城市教育委員会生涯学習課 課長補佐 小野瀬 美穂（茨城県）
3. 鹿嶋市高校生会の活動について
鹿嶋市青少年市民育成会議 事務局長 市田 信道（茨城県）

第4会場（共用会議室A）

1. 高校と地域の協働によるひとつづくり ～猪苗代高校での実践～
社団法人ブリッジフォーふくしま 安齋 憲二、沓澤 理恵（福島県）
2. 世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つ たかまつ
高松地区まちづくり委員会 委員長 高本 光祐（茨城県）
鹿嶋市立中央公民館 館長 加藤 義浩（茨城県）
3. 公高？連携 ～設置者の違いはハードルか？～
千葉県立八千代東高等学校 校長 遠山 宗利（千葉県）

情報交換会&第11回大会交流会 18:00～（※有料 先着80名）

第2日目
12/13（土）

つながりづくりタイム 9:00～

◎特別講演 9:30～

「分断と砲弾の時代どう乗り越えるか 国際協調主義と日本の役割」

一般社団法人共同通信社 特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実 氏

○トークセッション 11:00～

「平和と多文化共生社会の実現に向けて～未来のために今わたしたちができること～（仮）」

日本国際学園大学経営情報学部3年 トロプチン・ニキタ氏（茨城県留学生親善大使）

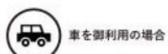
茨城県立水戸第一高等学校2年 中垣 美咲氏（令和7年度高校生平和大使）

水戸市立常澄中学校2年 大場 星寧氏（令和6年度水戸市平和大使）

クロージングトークセッション 12:00～
大会終了12:30

※ 日程や会場（教室等）については、当日変更になることもございますので、ご了承ください。

MAP



車を御利用の場合

茨城県三の丸庁舎駐車場を御利用ください。
【駐車料金のご精算について】
センターご利用時には必ず駐車券の精算処理を行ってください。駐車券をご持参の上、水戸生涯学習センター受付でお申し付けください。



電車を御利用の場合

・JR水戸駅 北口から徒歩15分
【JR水戸駅よりお越しの場合】
JR水戸駅北口から国道50号を大工町方面へ向かい、「中央郵便局交差点」を右折し、「龍判所南交差点」を左折して三の丸庁舎正入口となります。



バスを御利用の場合

・「観音坂」バス停より徒歩約7分
【乗車するバスについて】
JR水戸駅北口バスのりば④～⑥番線から乗車ください。④～⑥番線から乗車するバスは、いずれも「観音坂」を経由いたします。

申込方法

以下のQRコードより
お申込みください↓



大会の情報はこちら
から↓



申込締切

令和7年11月30日(日)

留意事項

個人情報は、本交流会に関すること以外の目的では使用いたしません。また、交流会の様子(写真、動画、アンケート内容等)をSNSや報告書等で使用することをご了承ください。

問合せ先

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会事務局
(茨城県水戸生涯学習センター内) 担当: 鈴木、大口
TEL: 029-228-1313
mail: kikaku@mito.gakusyu.ibk.ed.jp

2025年
12 / 13
13:30~17:00
(受付13:00~)



国立教育政策研究所 令和7年度教育研究公開シンポジウム
**これからの時代の
社会基盤としての
社会教育を考える**
〜今、なぜ社会教育なのか〜



社会教育実践研究センター設立60周年を記念して、シンポジウムを開催します。
現在、中央教育審議会において社会教育の在り方について議論されており、社会教育主事や社会教育士の取り組みの活性化による地域課題の解決等が期待されています。
本シンポジウムでは、「今、なぜ社会教育なのか」と題して様々な「コミュニティ形成」の現場を取り上げながら、真の「社会基盤形成」とは何か、そのためにどのような社会教育の学びが必要なのかについて考え、社会教育の推進に資することを目的とします。

特別講演

これからの社会教育の在り方を考える
〜アートで社会課題を解決する取組から〜



東京藝術大学
日比野 克彦 学長

場所 **文部科学省3階講堂**
(東京都千代田区霞が関3丁目2番2号)

ハイブリッド開催 (対面及びオンライン)
定員 ・会場150名 ・オンライン600名

参加対象者 教育委員会関係者、社会教育主事、社会教育士、社会教育関係者及び一般の方

申込方法 本研究所ホームページ「イベント情報」の特設サイト
および 以下の受付URL、二次元バーコードより ▶

受付URL <https://business.form-mailer.jp/fms/4c343c77305820>



申込締切 2025年12月9日(火)15時まで 定員になり次第締切

参加無料



お申込みに関するお問合せ

教育研究公開シンポジウム
申込受付事務局(株式会社Piic)
TEL/03-6822-5350
E-mail/convention@piic-inc.com
受付時間/10:00~17:00(土日・祝日を除く)

主催: 文部科学省
国立教育政策研究所
NIER National Institute for Educational Policy Research

共催: 文部科学省
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY INKAA

これからの時代の
社会基盤としての
社会教育を考える
～今、なぜ社会教育なのか～



2025年

12

13

13:30~17:00

(受付13:00~)

プログラム

- 13:30 開会挨拶 森田 正信 (国立教育政策研究所 所長)
高田 行紀 (文部科学省総合教育政策局地域学習推進課 課長)

特別講演

- 13:45 「これからの社会教育の在り方考える
～アートで社会課題を解決する取組から～」
日比野 克彦 (東京藝術大学 学長)

調査研究報告

- 14:45 「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査」
中間報告
志々田 まなみ (国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官)

15:05 休憩

シンポジウム

- 15:15 「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える
～今、なぜ社会教育なのか～」
コーディネーター
青山 鉄兵 (文教大学 准教授)
登壇者
藤野 真一郎 (恵庭市教育委員会教育総務課 課長)
豊田 庄吾 (三次市教育委員会教育部 次長 (初代隠岐国学習センター長))
鈴木 貴司 (NPO 法人わかものまち / みんなの公民館まる センター長)

- 16:50 閉会挨拶 佐藤 貴大 (国立教育政策研究所社会教育実践研究センター センター長)

第11回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会

No	役職	氏名	組織・職名	備考
1	顧問	菊池 龍三郎	茨城県生涯学習・社会教育研究会 顧問（茨城大学名誉教授）	
2	委員長	長谷川 幸介	茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長	運営委員長
3	副委員長	稲葉 里子	茨城県社会教育委員連絡協議会 会長	
4		増子 靖啓	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長	
5		小沼 賢次	茨城県水戸生涯学習センター 所長	
6		池田 馨	茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長	副運営委員長
7	実行委員	羽石 康弘	茨城県水戸教育事務所 主任社会教育主事	
8		佐藤 みゆき	茨城県県北教育事務所 主任社会教育主事	
9		根本 聡美	茨城県鹿行教育事務所 主任社会教育主事	
10		大久保 正美	茨城県県南教育事務所 主任社会教育主事	
11		海老原 淳	茨城県県西教育事務所 主任社会教育主事	
12		鈴木 昭博	茨城県水戸生涯学習センター 次長兼企画振興課長	
13		小野瀬 静香	茨城県県北生涯学習センター事業グループリーダー	
14		出頭 秀彦	茨城県鹿行生涯学習センター 企画振興課長	
15		馬場 美佐子	茨城県県南生涯学習センター 事業課長	
16		法堂 泰明	茨城県県西生涯学習センター 所長	
17		阿部 智仁	那珂市教育委員会生涯学習課社会教育主事（幹事長）	
18		沼野 健一郎	日立市教育委員会生涯学習課社会教育主事（県北地区幹事）	
19		岸根 健二	鹿嶋市教育委員会社会教育課社会教育主事（鹿行地区幹事）	
20		高田 淳平	土浦市教育委員会生涯学習課社会教育主事（県南地区幹事）	
21	佐藤 裕隆	桜川市教育委員会生涯学習課社会教育主事（県西地区幹事）		
22	監事	見澤 淑恵	一般社団法人オリーブ協会 代表理事	
23		小室 弥生	茨城県県民生活環境部ダイバーシティ推進センター センター長	
24	事務局	鈴木 昭博	茨城県水戸生涯学習センター 次長兼企画振興課長	事務局長、運営委員
25		大口 武文	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	事務局員、運営委員
26		羽鳥 公寿	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	事務局員
27		伊藤 千智	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	事務局員（会計担当）
28		宮本 裕介	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	事務局員
29		菅谷 政之	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 社会教育主事	事務局員、運営委員
30		大月 光司	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局	事務局員、運営委員
31		村木 聖一	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局	事務局員、運営委員

事例発表運営スタッフ

所属・役職	氏名	備考
ひたちなか市教育委員会指導課 社会教育主事	渡邊 秀幸	大講座室(第1会場)
小美玉市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	三澤 秀生	
那珂市教育委員会生涯学習課 主査兼社会教育主事	阿部 智仁	
鹿嶋市教育委員会社会教育課 社会教育主事	岸根 健二	中講座室(第2会場)
神栖市教育委員会文化スポーツ課 主任社会教育主事	犬塚 将己	
行方市教育委員会生涯学習課 参事兼社会教育主事	永作 泰弘	
石岡市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	福田 雅人	小講座室(第3会場)
龍ヶ崎市教育委員会文化・生涯学習課 社会教育主事	海老澤 大輔	
つくばみらい市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	鈴木 令子	
桜川市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	佐藤 裕隆	共用 A 会議室 (第4会場)
古河市教育委員会生涯学習課 課長補佐兼社会教育主事	因泥 辰也	
下妻市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	井川 佑一	

ボランティアスタッフ(茨城県社会教育人材ネットワーク)

古河市立三和中学校 教諭 稲葉 洋一

茨城県立海洋高等学校 教諭 榊原 祥孝

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
第11回大会 実行委員会

事務局 茨城県水戸生涯学習センター企画振興課
〒310-0011 茨城県水戸市三の丸1-5-38 茨城県三の丸庁舎3階
Mail:kikaku@mito.gakusyu.ibk.ed.jp
TEL:029-228-1313